

# 全国同人雑誌最優秀賞 第15回 まほろば賞 発表

今年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。よろしくお願いします。

第一五回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二一年七月二五日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

今年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特別賞、三田誠広賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円およ

び記念品を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願います。全国の同人雑誌賞式は十月三十日土曜日東京神田「山の上ホテル」での全国同人雑誌協会総会・全国同人雑誌会議にて行われます。協会会員以外の方でも参加できますので、どうぞ御来席ください。

またこの結果及び選評とその動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

## 第15回全国同人雑誌最優秀賞

### まほろば賞

「破れ蓮」  
はちす

〔じゅん文学〕104号

飯田 芳

### 特別賞

「狐火」

〔仙台文学〕95・96号

渡辺光昭

### 三田誠広賞

「夢の岸」

〔中津川文芸〕復刊5号

鴨居 諒

### 河林満賞

「しずり雪」

〔飢餓祭〕46号

小網春美

### 読者賞

「負け犬」

〔ふくやま文学〕32号

瀬崎峰永

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

## 選評



みた まさひろ  
1948 大阪生まれ  
早稲田大学文学部卒  
77「僕って何」で芥川賞受賞  
作品はほかに「いちご同盟」  
「空海」「親鸞」など  
最近の本「遠き春の日々」  
日本文藝家協会副理事長  
著作権情報センター理事  
日本点字図書館理事  
武蔵野大学名誉教授

## 評価が分かれた

## 三田誠広

候補作のレベルが高く評価が分かれたため選考は困難を極めた。最終的には順位をつけざるをえなかったが差は僅かだ。票が集まらなかった「負け犬」（瀬崎峰永）は暴行の被害者の少女が自殺に到る話だが、救急センターの報告書から始まって、医師を中心にした三人称の叙述、ソーシャルワーカーのカンファレンスメモと、多彩な文体の断片を重ねて、描かれている事実に客観的な視点をもたせよ

リアリズムで描かれる。蓮根を栽培する泥田の中での母殺しに到る展開は圧巻で、受賞に相応しい迫力がありテーマの重さがあった。ただこの主人公が蓮根を栽培するほかには労働意欲に乏しく、妻や子に対して冷淡であることで、読者はシンパシーをもてないのではないかと懸念が残る。とはいえこういう人物はどこにでもいるはずで、作品のリアリティーを削ぐものではなく、受賞に値する作品であることは認めないわけではない。

ここまで述べた三作はリアリズムで描かれているのに対し、「狐火」（渡辺光昭）はリアリズムの領域から一歩踏み出そうという意気込みに充ちた果敢な作品と感ぜられた。精神に障害を負った伯母のエピソードが中心に置かれている。主人公が生きている日常の世界から見ると、奇行を重ねる伯母の姿は日常性に危機をもたらす異物と感じられる。しかしながら作品の書き手はこの伯母の話を始める前に、主人公の日常である朝のバス停で奇行を重ねる謎の男を描き、主人公が男のあとをつけていく過程を丹念に描く。そのことによって伯母の存在は異物ではなく、むしろ日常性を超えた不思議な領域とつながっていることが示される。さらに作品の最後にもこの謎の男が登場して、主人公と読者をリアリズムを超えた異様な世界にいざなっていく。この作品は「異様を描く」という文学の本来の在り方につながる重要な要素をはらんだ秀作だとぼくは考える。ここに

うという試みを評価したい。残念なのは被害者の告白の部分が長すぎて、作品が単調になり、せつかく試みた客観性が崩れてしまったことだ。少女の告白そのものにはそれなりの説得力があるのだが、そこに単純なファーザーコンプレックスという見解を提示する医師を登場させることで、かえって作品を底の浅いものにしていく。あるいは思いやりの深いソーシャルワーカーが登場するので、彼女の視点ですべてを描くのも一つの方法だったのではないかと思う。次の「しずり雪」（小網春美）は商業文芸誌に多い絵空事のような恋愛とは一線を画した、老いた男と中年の女の奇妙で危うい関係を精密に描いた作品で、経営者と従業員という立場の違いや年齢差、さらに死に瀕した病人と介護者という関係を超越した、類例のない確固とした絆が男と女の間に芽生え深まっていくさまが、見事に描かれている。リアリズムに徹した筆致にも好感がもて、重い読後感をもたらす秀作であると思われた。例年のレベルであればこの作品がまほろば賞であつてもよかつたという気がしたが、昨今の同人誌の充実ぶりを見ると、来年はもつとレベルが上がりそうだという予感がする。

まほろば賞に決まった「破れ蓮」（飯田芳）は崩壊しつつある農村を舞台に、嫁姑の問題から老人介護の問題に移行し、さらに認知症の進行から暴力性を帯び、もはや怪物のような存在となった母親の姿が、息詰まるような濃密な

は文学の本質に通じる貴重な試みがあり、それが読者を惹きつける独特の魅力になっているのではないだろうか。

こうした素晴らしい作品群の中でも、ぼくがとくに注目したのは「夢の岸」（鴨居諒）という掌編だ。ほかの作品に比べてあまりにも短く印象はうすいのだが、何気ない日常の断片を列ねただけのエッセーのような語り口に、散文詩のように清冽な、一種の名人芸としか言いようのない文体が見てとれる。そこで描かれている日常の断片は、リアルであると同時に不思議な浮遊感を帯びていて、まさにタイトルに示されたような夢幻の世界の入口のような魅力的な気配を漂わせている。

それだけではない。最終的なエンディングの部分に到って文体はさらなる輝きを放ち、そこまで列ねられた一見バラバラのように見える断片が互いに交錯し、有機的に結びついていく。そのことによってこの作品がただの随想ではなく、作者によって緻密に構築された野心的な文学作品だということが明らかになっていく。しかも作品の冒頭で示された小舟のイメージが最後に再び登場するに及んで、作品は見事な円環を成して終結する。このような秀作がさりげなく置かれている同人誌の世界の奥深さに、改めて感動を覚えずにはいられなかった。



こはま きよし  
1950 沖縄県生まれ  
劇団四季など様々な職を遍歴  
87 作家中上健次に師事、マ  
ネージャーを務めるかたわら  
文学修行  
88 「風の河」で文学界新人賞  
を受賞  
他の作品に「消える鳥」「後  
生橋」「光の群れ」「火の闇」  
などがある

## どれも鮮烈な作品

### 小浜清志

「負け犬」瀬崎峰永。壮絶な作品である。特に手記の場面は鮮烈である。

白杖の太ったおばあさんに親切心をだして家まで送り届けてから知らない道を歩いた。公園脇にパール色のハイエースが止まっていて運転席から大きくてマッチョな男が降りてきた。スキンヘッドでヤバそうな男だったので私は車とは反対側を歩いた。しかし、男は私に近づいて来るなり、ねえごめんと話しかけてきた。なにがごめんだろうと振り向いた瞬間拳骨で頬を殴られ私は道に倒れる。男はそんな私をハイエースの後部座席まで引きずっていく。私は気が狂ったように大声をあげて助けを求めると、男は私のアゴ

もあった。二度の離婚をした直後に立花と食事をしたとき、徐々に肥満の度合いを深めていく立花に私が忠告すると、僕が病気になるって先がわからないとなったら七尾と結婚すると立花が宣言した。結婚するという言葉があまりにも軽かったが、急に重くなっていく。互いに独身であり年の差があったとしても男と女である。私は逃げ口上として、結婚なんかしなくたって立花さんが病気になるったら必ず面倒はみます、立花さんの死に水は私が取ってあげますからと答えてしまった。逃げ口上ではあったが家族のいない立花の面倒は私が見るのだと思った。だから、結婚でなくて、養子だつたらなつてもいいと伝える。だが、立花は強い口調で養子ではだめなんだと言ったが、口調を和らげるように、七尾に死に水を取ってもらえろとは嬉しいね、そうしたら僕が今住んでいるマンションをあげるよと告げた。そんなやり取りがあつてから間もなくして会社の経営が悪化する。二年間低空飛行を続けたのち大手の会社との合併がみのる。社員たちは喜ぶが私は会社を辞める。私は会社を辞めても定期的に立花と連絡をとり合っていたが、ある日マンションに呼び出されて病氣のことを知らされ、結婚して金沢で暮らさないかと頼まれる。悩んだあげくに立花の介護をする決心を固めるが、親には言いだしにくい。しかし、金沢行きはいきさつを伝えると、あんなにお世話になった社長の面倒を見る仕事だと割り切つてがんば

を拳で殴りごめんと呟く。周りには人がいたはずなのに誰も助けには来なかった。男は車を十分ほど移動させ大音量の音楽をかけたまま後部座席に来るなり平手でなんども顔を殴り制服のスカートをめくつてくる。

レイプの描写は幾度も目を背けなくなったが、ただその迫力にねじ伏せられてしまった。迫真の表現は時に戦慄さえ覚え、紡ぎだされる文字に翻弄されつづけた。いたるところにリアリティがありこれは経験者の手記かとさえ思った。人間が泥にまみれ地獄へと落ちていく様をこれほど完璧に描かれると文字は凶器にもなりえるのだと怯えた。最初に読み終えた時、当選作でもないのではないかと思つた。私はこの作品を生涯忘れることはないだろう。

「しずり雪」小網春美。しずり雪という言葉がこの作品で初めて知つた。「私」七尾朱里と立花修司の不思議な関係を描いた作品でも好感を覚えた。

私は立花の経営するラクトラベルでアルバイトとして働き始める。周りは全員大卒であるが私は専門学校卒。しかし、一年のアルバイトから正社員になると私は頭角を現しつねに上位の営業成績を争うようになる。そしてついに社長である立花と対等に渡り合うようになる。プライベートでも付き合いが増えていくが一線を越えることはなかった。それは二十六歳という年の差もあり私の二度の離婚でりなさいと逆に励まされてしまう。死に向かい弱っていく立花との金沢での生活を作者は丁寧に繊細に描いていく。立花の意向を受けて婚姻届けを提出するまでのいきさつも破綻なく表現される。そして、立花の前で私が全裸になった場面は思わず快哉を叫んでいた。男と女の危うい空気がきちんと掬い取り巧みな文字でひろげてくれる作品世界に心が癒された。

#### 「狐火」渡辺光昭。

書き出しから不思議な人物が登場する。決まった曜日と決まった時刻にひとりの男が現れる。通勤者や高校生の列が生まれ始めると、そのタイミングを計つたように毎回思いがけない場所から現れ、列の端から端まで二度行きつ戻りつして、そのなかの一人の傍らにたつ。思いもかけず男に選ばれてしまった当人は、困惑して男を無視するか並ぶ場所を変えたりする。誰に狙いを定めるか、男の根拠は不確かで気紛れにしか見えない。男はその後あらためて最後尾につく。自分の後ろに新たに人が並ぶとさつと身を翻して脇に退き、会釈して場所を譲る。やがてバスがきて行列は次から次へと車内のみ込まれていくが男は自分の番がやってきても乗ろうとはせず、駆け込みで乗車する人の進路を妨害しないように立ち、慌ただしく乗りこむ一人一人を見送る。その間も、男の口元からは切れ目なくつぶやき



声が漏れ出ている。やがてバスが走り出す後姿を、男は直立不動のまま、敬礼の姿勢を取って見送り続ける。この変わった男とともに本多暁子という伯母の存在がこの作品をより複雑なものにしていく。十五年前の、夏休みに入ってからまだ間もない昼下がり、学生服に身を包み、学生帽を深くかぶった人が玄関に立っていた。学生帽の庇で顔の半分はかくれていたが白い肌も鮮やかな唇も学生服には違和感があった。「たみおちゃん、ただいま」と主人公直也の父の名を呼んだ。突然背後で悲鳴があがる。母が両手で口を押えたまま棒立ちになっていた。玄関での騒動を聞きつけて妹の梨沙も母の腰にすがり付くようにして訪問者を見ている。狼狽する三人の後ろから祖母が現れ訪問者が暁子伯母だと直也がようやく納得する。暁子は波乱な人生の後精神病での入院生活を余儀なくされ、二か月前に大腸がん末期の診断を受け入院した病院が直也の近くだったため直也が緊急連絡先にされていた。一度会ったきりの暁子伯母が危篤になったとの連絡が入る。時計は午後十時を回っている。最終バスは終わっているし、酒を呑んでいるので車は運転できない。降りしきる雪で交通網は混乱しているであろう。結局二時間かけて辿り着いたが叔母はずでに息をひきとっていた。慌ただしい葬儀を終えて久しぶりに仕事に復帰すると決めると、バス停の男の煩わしさが甦ってくる。しかし、男は現れることはなかった。休みの日に

た。という妄想のような話からはじまり、次は娘の人形が消えるというエピソードにつながる。文化祭の演劇で人形が小道具として使われることになる。娘が小さい時に買った人形であるがそれは瀬尾にも記憶があった。そして、次の日曜は一家総出で大捜索を行う。家の中のありとあらゆる場所、押し入れの奥、倉庫の中に収めているものを出してまで捜すことになった。しかし、何処にも見あたらない。

「静香があまり放っておくものだからきつとこの家に嫌気がさして出ていってしまったんだよ」

まるで人形に意志があるような最後の言葉が夢の岸と繋がっている。次の竹藪でも同じように夢という曖昧模朧とした概念に向かおうとする。それは家の庭に植えてある花にも現れる。「まるで花達が瀬尾のした何かに腹を立て、しめしあわせて花を咲かせずにいるように思えて仕方がなかった。」

そして、花の咲かない椿の木を切ろうかと庭師と話した翌年にその椿が一遍にたくさんの花を咲かせるようになって。という友人の話に発展していく。まさしく夢の岸辺にたどりつく人間の想像は物にも植物にもあるだろう。

「破れ蓮」飯田 勞

当選作になったこの作品は何といっても緻密さと勢いに

かつて男を尾行したことのある道を辿ってみると男の住んでいた家は火災にあつたらしく黒ずんだ柱があるだけだった。そして、夢のなかで男の家に火を点けたのが暁子伯母だと男が告げる。そして「キツネビが遠くに見えていても、そんな時には、キツネは見ている人間の隣にいるんだ。」という謎の言葉を残す。

男も暁子伯母も直也の妄想ともとれる。見方を変えてもそれぞれに見えるのがこの作品の奥の深さであろう。

「夢の岸」鴨居 諒

池の端に小さな船が引き揚げられている。瀬尾が散歩するときには必ず通る場所で、家から歩いて十五分ほどの場所にある。はじめはよくある風景だと思っていたが、よく考えてみたら疑問が次々と湧いてくる。そんなに大きくもない池に船を浮かべても景観がいいとは言えない。ボート乗り場にあるような二人乗りの船で魚釣りをするのも釣り合いである。少し長めの棹さえあれば池のどこにでも釣り糸は垂らせる。そこで釣りをしている人を見たこともないし、魚がいると聞いたこともない。瀬尾はその夜家族と夕食をともしながらボートのことを考えていた。あの船は夜みんなが寝静まった頃何処かへ出掛けているに違いない。そして朝になるとまるで何事もなかったように、そしてらぬ顔をして全く同じ場所に戻っている。そんな想像をし

あふれている。レンコンを細々と栽培しながらバアバの年金をあてにしながら生きている私は、かつて勤めていた鉄工所にとまどき部品を届けにきた工具店の娘と所帯を持った。子も生まれ親と同居するようになってから妻との距離がひろがっていく。バアバと妻のあいだでうろろろするしかなかった。父が死んでからバアバが豹変する。葬儀から戻ってきた夜からバアバは父の座っていた場所を占領し周りは嫁の悪口を吐き散らしていた。妻から別居を切り出されたがそれを実行するには金銭的にも余裕がなかった。ある晩からバアバの奇行が始まる。押し入れにあった古い枕を女の子の死体だと喚んでいるのである。その後バアバは夜の一時頃になると同じような騒ぎを起こすようになる。妻は寝不足になりパートへの出勤途中で追突事故を起こしてしまう。

それからしばらくして妻は家を出て行く。

痴呆の進んできたバアバの奇行を食い止めるため外側から鍵をかけて出掛けるようにしていたが、ある日玄関の外鍵を忘れて外出してしまった。農協の人と立ち話をしているときバアバの姿を発見する。家では前屈みで歩幅も小さく、時には壁伝いで歩くバアバがまるで鎖を解き放された犬のように、大手を振って歩いている。いかにも楽しさを感じている大きな腕の振り、目標があたかも定まっているかのようなしつかりとした足取り。バアバを追いかけてい



くが私の息はすであがっていた。田のひろがる所に立つた。バアバは遠い先を相変わらず歩き続けている。家での様子は仮の姿だったのだろうか。私は何度も立ち止まり深く息を吸って走り出した。しかし、バアバはあろうことか植えたばかりの田へ飛び込んだのである。逆にたじろいだのは私の方だった。まだ根もはってない苗は踏まれればすぐに浮いてしまう。急いで田から引き上げなければならぬ。バアバは容赦なく田を横切る。しかたなく私も田に入りバアバを捕獲する。二人はずぶ濡れ泥まみれになる。バアバを背負い家に戻る。私はやるせなさを抱きながら、バアバが踏みつぶした苗の事を思うと一層足取りが重くなつた。

湯船に湯をはりながら、タイルの床に泥が落ちるのも構わずバアバの衣服を手荒くはぎ取っていく。そこから、私がバアバを溺死させるまでの描写が素晴らしい。遊びにも似た湯船でのやりとりが死に繋がっていくのは自然な出来事に見えた。実際に経験をしたことがあるかどうかは別としても作品から伝わってくる迫真性は読み手を惹きつけて放さなかった。一つだけ残念に思ったのは冒頭にバアバの死を持ってきたことである。

賞を取りにくい。賞を取る場合は、否応なく認めさせるだけの強烈な振り切りを示す場合だろう。負の領域を示しての優れた作品はドストエフスキーの「悪霊」やフォークナーの「サンクチュアリ」などがあり、佐木隆三の「復讐するは我にあり」もそれに近く、その徹底した「悪」の露呈には圧倒され、完璧に打ちのめされるが、そこまではなかなか到達しにくい。中途半端さが若干救いにもなり、それがまた逆に後味の悪さもなつて残るのかもしれない。

今回はおそらく評価がバラバラで、どの作品がどんな支持を受けるか、予測がつかなかった。どういふ結果になるか、危うい気持ちで選考会に臨んだ。果たして蓋を開けてみると、まったくその通りになった。これほど割れた選考会は初めてだった。しかしこういう選考会があつてもいい。二回前の選考会は満場一致で決まった。その逆があつてもおかしくない。

瀬崎峰永氏の「負け犬」は、強姦された少女の手記が主旋律になっている。方法は新鮮で、突き放した冷たい叙述がそのリアリティを引き立たせていて、主治医師や看護師の態度が少女の輪郭を際立たせている。医師には医師の世界があり、看護師には看護師の世界があるという割られた存在は、真に交わることなく、事件の結末を招いていく。描写は鋭く、冷たさが光を帯びている。学校に行かなくなり、転落の道を辿って自分の右腕に「負け犬」と刺青する



いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ  
早稲田大学文学部文芸科卒  
79「流涕の島」群像新人長編小説賞  
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長  
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

## 迫力ある問題作

### 五十嵐勉

第一五回を迎えたまほろば賞は、候補優秀作が五篇で普段より一つ少なかったが、問題作が集まった。題材が衝撃的で、負の領域に引き込まれる迫力はこれまでで最も大きかった。特に「負け犬」、「狐火」、「破れ蓮」は、それぞれ犯罪の領域にまで深く踏み込むことよって日常を暴いていて、その切開力は鋭く、否応なく内臓を見せつけられる迫真性は、スリリングで、文学の一つの領域をあらためて開示してくれるものだった。ただ、迫力は強いものの、読み終わって読後感がいいかと言うと、何となく後味の悪いものが残る。それがやや作品を親しくさせないもどかしさをも内包していた。またこういう領域の作品は、一般的に

シーンはこの筆者でなければ書けない痛烈なものがある。またそれぞれの部分や領域を丹念に調べてその上で書いている生々しい筆致がある。本来このリアリティだけでも賞に値すると思われるが、今回は鳥への個人の趣味に埋没する医師の顔や看護師の関わりの遠さが間接的に少女を自死に追い込んでいく冷淡さが逆に足を引っ張った。父親へのコンプレックスが示され、「負け犬」という視線で見下す父親が会いに来ると言うことを聞いて自死するその理由の、深い位置での事情が示されていないところにやや曖昧な不足感が残る。これらが真に一つの方向を向いて焦点を示されれば、より完成度は高まっただろう。力量はあるので、また気を取り直して意欲作に挑戦してほしい。

「まほろば賞」となった飯田芳氏の「破れ蓮」は、現代版「母殺し」の小説である。筆者の確かな筆致によって、介護を受ける認知症の母親を殺さざるをえなくなる過程がしっかりと描かれている。その流れに淀みはない。妻の離反、彷徨、便の処理、叫びと、殺しへ追い詰められていく悲劇性は確かに収斂している。これはまた、この過程で不思議な普遍的共感を呼び寄せてくる。それは現在の日本において、同じような立場に立たされ、殺意と忍耐と愛情の間を揺れ動いている人たちがたくさんいることの共鳴である。それは大きなものとして鳴り響きつつ、もう一つ躊躇いのうちに別な眼差しをも投げてくる。自分の母親を「バアバ」と簡

単に呼んでしまうその命の関連の希薄さ、母親の頭を湯船に押さえ込む自分の手の力の虐待性——それらはある一線を超えてしまう罪悪の欠如を伴って、親子の根本を腐食させる。主人公は最後に死んだ母親に誘われるように蓮池の泥沼に吸い込まれるのだが、最も重要な親子の間の尊厳に、迫り切っていない恨みが残る。より広がりを感じさせる側面と、何か重要なものが置き去りにされている不足感とが、背反しているところにこの作品の特徴がある。

特別賞となった渡辺光昭氏の「狐火」は、バス停で待つ人に順番を譲っていく奇行の持ち主の人物像が妙に生々しく、不思議な存在感を持っていて、つい引き込まれて読んでもしまう。また精神病院で亡くなる伯母の「暁子」の存在も魅力があり、学生服を来て家に勤め先から逃れてくる狂気の端緒も鮮烈に残る。風変わりな狂気の系譜がここには確かに流れており、それが生きる過程でつねに足元に覗いているその危うさも、主人公を通して迫ってくる。最後は狐火の炎の舞に呑み込まれていくのだが、最後まで狂気に逃れていった伯母と火事でわからなくなった奇行の男の像が焼き付いて離れない強い残像を持った作品である。

後味の良さは鴨居諒氏の「夢の岸」が一番で、夢と現実のあわいが見事に描かれていて、生命というつねに揺れ動いている表象の浮薄性と流動性が浮かび上がってくる。竹藪も台風も草も木も、みな命の表象としてうねり動いてい

るその万象の命の模様が感じられるところに、この作品の妙味がある。夢のつながりは生命のつながりとして巡り動いている鼓動が聞こえてくる。この作品は特に三田誠広氏が高く評価し、「三田誠広賞」を授与された。三田氏がここまで支持したのは、初めてである。祝意を表したい。

小網春美氏の「しずり雪」は元会社の上司の癌末期の看取りをする女性のストーリーで、随所に見られる確かな叙述が経験によって磨かれた光を放っている点に魅力があった。男女に存在感がある。年齢差や財産の引き継ぎにやもたついた筆跡も感じられたが、「しずり雪」という魅力ある言葉を選ぶ感覚や、旅行会社の世界を的確に描く実社会の重みを備えている点でも、評価が高かった。特に中上紀氏と小浜清志氏がこの作品を買って、河林賞に推挙した。

今回から、「まほろば賞」は、徳島県三好市の「富士正晴同人雑誌賞」を引き継ぐ形で始まった全国同人雑誌賞と並ぶ大きな賞となり、いっそう重みが増したように思う。実質的に「まほろば賞」のこれらの作品は昨今の芥川賞作品よりも優れている。インパクトもある。今夏の芥川賞二作品も読んでみたが、ぬるくてボケている。同人雑誌に拠って創作に励む作家は、そんな作品を踏み倒し、「自分が日本文学の流れを変える」くらいの意欲を持って、新たな力作を発表して欲しい。



なかみ のり  
1971 東京生まれ  
ハワイ大学美術学部卒業  
99「イラワジの赤い花」ミヤンマ  
ーの旅 (集英社) を上梓  
同年「彼女のプレнка」(集英社)  
ですばる文学賞受賞  
「悪霊」(毎日新聞社)「いつか物語に  
なるまで」(晶文社)「夢の船旅—父中  
上健次と熊野—」(河出書房新社)「ア  
ジア熱」(大田出版)「シャーマン  
う夜」(水の宴) (集英社)「海の宮」(天  
狗の回路) (筑摩書房) など著作多数

## 現実から逃げてみた先

### 中上紀

今年もまほろば賞の選考に参加させていただいた。去年に引き続きコロナ禍での開催であったから、人恋しさがひととき募り、会場で選考委員の三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各氏にお目にかかるのが楽しみでならなかった。この日に語り合った小説五作品も、例年以上にレベルが高く、素晴らしいの一言だった。疫病という怪物は、もはや日常生活に当たり前のように横たわるようになったが、文学だけは脅かすことはない。まほろば賞を感じた選考会だった。

さて、そうは言いつつも、選考そのものはかなり難航した。なぜなら、五作品それぞれが、まったく異なる切実さ

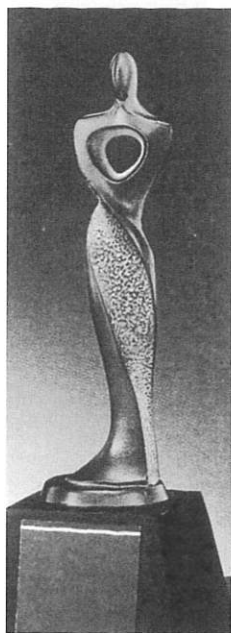
のある、重々しいテーマを抱いているのである。私自身、最後の最後まで悩み、推すべき作品を決められないまま、選考会に臨むしかなかったくらいだ。かくしてお聞かせいただいた各先生方のお話は、すべて納得が行き、かつ勉強になるものばかりであったが、同時に何れの作品にも受賞の可能性があると、逆にはつきりと突き付けられ、結果さらに決断を迷うことになった。投票は一回目で決まらず、二回目ようやく決定という経緯であった。

以下、私の感じたことを順不同に書かせていただく。

小網春美氏の「しずり雪」は、主人公である七尾という女性の繊細な心情に心を重ねながら読んだ。七尾が最後まで看取る決心をした年の離れた男性立花は、会社の社長だけれども、同時に親のようでもあり、恋人のようでもある友人だ。特定の呼び方で呼ぶことが出来ない、この微妙な関係性のあわいに引き込まれた。人間関係は、年齢を重ねるにつれて、はつきりと名前を付けることの出来ないあいまいなものが増えていく。七尾自身も、二度の結婚に失敗し、子どもも二人いるいい年なのである。立花との生活はほとんど介護である。やがて男は結婚を求め、七尾は受け入れられるが、彼には財産があった。何の計算もないなどと言った嘘になるが、同時に、あえて相続を了承することで立花を後ろめたない気持ちにさせないという七尾の優しさが胸を打つ。金沢の風景、そしてはじめて目にした雪の形の「し



第15回まほろば賞選考会風景 2021.7.25 大田区民プラザ会議室で



作家集団「塊」／芸芸思潮

## 河林満賞の移設コンテスト

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。(二〇二二年改訂) この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

ずり雪」の描写に引き込まれた。

瀬崎峰永氏の「負け犬」では、まず病院のスタッフや患者をいろいろな鳥に例えるのが好きな個性の強い医者に目を奪われる。入院している少女が記した手記に書かれた生い立ちから性暴力を受け自殺未遂に至るまでの経緯は生々しい。幼い妹を失ったという過去や、父親と一緒に入浴した時にされた行為など、気になる部分を孕んだ父親との関係性が、綾乃の自殺で一方的な謎に書き換えられて読者に突き付けられる。途切れてしまったのは、自らの手で自由を手に入れた命が、どこかへ飛んで行ってしまったからなのだろうか。あるいは、医者言葉のように彼女が鳥のようなのだとしたら、これは鳥葬か。

「狐火」は渡辺光昭氏の作品だ。バス停で出会った奇妙な男を追いかけていくことでふっと日常から離れた別の次元のような世界に入り込むという経緯が面白い。その男が醸し出す非日常性から、主人公は異質な存在であった自らの叔母を思い出す。出てくる人物たちみんなが狂気を孕んでいるようなエンディングには圧倒された。もちろん、一番は主人公であろう。男の家が火事で消滅し、住人が行方不明と聞いて、直也は過去の火事とそれを重ね合わせるのだが、直也が忘れたいと思っていたことを、幻想の中の叔母に告げられ、破滅していく経緯には圧倒される。

鴨居諒氏の「夢の岸」は、語り手である瀬尾の幻想が日

常をじわりじわりと浸食していく形で進んでいく。大きな事件が起こるといったのではないが、池に浮かんだボートであったり、庭で育てている芍薬であったり、紛失してしまった娘の人形であったりといったモチーフが、カラージュのように独特の世界を作り出している短編だ。ここにも微かなズレのようなものを感じた。厳密に言えば、夢と日常の境界を感じた。その夢の中で主人公は気付いたら「みんなが寝静まったところ何処かへ出かけて、夜には「その場所に戻っている」というボートに乗る。そして皆さんの記憶の断片が現実の声のように主人公の前に立ち現れてくる。

飯田芳氏の「破れ蓮」の主人公「私」は、物語の最後で蓮田に沈めた母親の胎内に還っていく。途中から、読み手が先を想像できてしまう展開ではあったが、しかしながら、補って余りあるほどの筆の力と、目をそむけたくなくなるほどの生への執着があった。介護と一言で言い表すにはあまりにも重い問題の中で、夫の妻は苦しみぬいた末に逃げ出した。残された認知症の母親を前に追い詰められていく「私」は、他人ごとではない。ラストシーンで、蓮の田から抜けることが出来ないのは、主人公の罪悪感の回収だろうか。レンコンの収穫の様子を女体の愛撫に例えたのが斬新で、目がくぎ付けになった。

現実から逃げ出した先を覗き見るように読み終えた五作だった。



まほろば賞 受賞の言葉 飯田 労

現在七十二才の私は妻と共に九十三才の母の介護をしています。同時に通所介護の送迎運転手もやっています。仕事としての介護の私は「寛容と忍耐」という言葉を心に持ちます。それが親と子となると血の濃さゆえか感情の乱れ（疲労・絶望・暴力・殺意）が生じます。あとは行動に移すか、とどまるか。

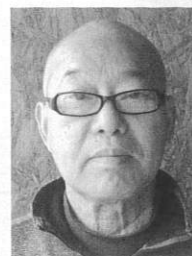
何時、作中の主人公と作者の私が入れ替わるかも知れない、といった懸念を抱きながら、私はこの作品を書きました。

今迄良くして頂いた皆様の顔が浮かびます。ありがとうございます。

まほろば賞

「破れ蓮」

飯田 労



飯田 労 いろいろ

1949 金沢生まれ  
本名 飯田誠治  
同人誌「渤海」「彩雲」を経て  
現在「じゅん文学」同人  
金沢在住



まほろば賞は、読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高の作品に読者賞を贈ります。今回は寄付金合計金額は49000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。全国同人雑誌振興会

特別賞 受賞の言葉 渡辺光昭

この度は、全国同人雑誌特別賞をいただき、ありがとうございます。同人誌「仙台文学」に参加して、二十数作を発表してきましたが、どれも自己満足の域を抜け出せませんでした。いったい今の自分の実力はどの辺りにあるのか分からず、手探りの状態でした。この度、願ってもない評価をいただき、自分のこれからの歩むべき方向性がより確かなものになりました。まだまだ未熟なところが多く、満足のいく作品に到達することは至難の業ですが、さらなる高みを目指して一歩一歩努力を積み重ねていく所存です。

ありがとうございます。

特別賞

「狐火」

渡辺光昭



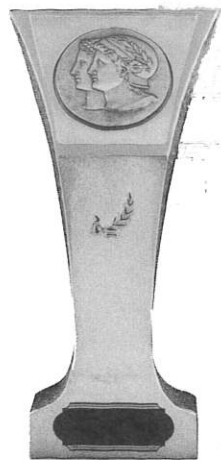
渡辺光昭 わたなべ みつあき

1949 宮城県生まれ  
宮城教育大学教育学部卒業  
東北学院榴ヶ岡高等学校国語教諭  
「仙台文学」同人  
宮城県芸術協会会員  
著書『いつか水色の橋を渡って』  
(近代文芸社)  
『起こすか？ 戻すか？』(文芸社)  
『停留所』(編集工房)

仙台文学



95



三田誠広賞

受賞の言葉

鴨居 諒

候補作に入れてもらっただけでも光栄に思っていたところ、思いがけずこのような賞をいただいていたいへん嬉しく思っています。しかも三田誠広さんにこれほど高い評価をしていただくとは想像もしていませんでした。昔は書くときに変な気負いのようなものがあつたのですが、今はどんなささやかなテーマ、モチーフでもできるだけ丁寧なすくいあげて、言葉にしていこうという、書くと言うことに対しての以前とは少し異なる、自然な心持ちがあります。そんな姿勢もよかったのかもしれない。ありがとうございます。

三田誠広賞

「夢の岸」

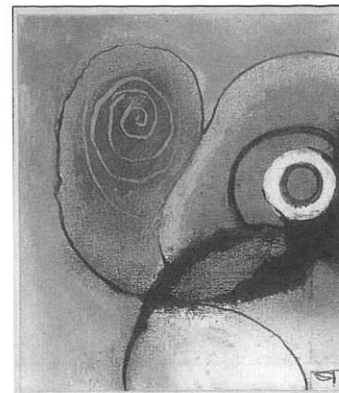
鴨居 諒



鴨居 諒

かもい りょう

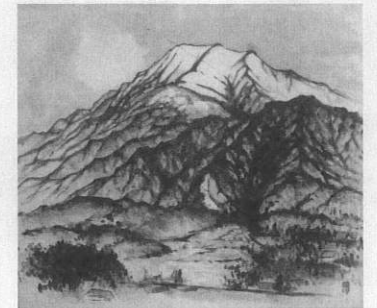
1949年生まれ  
同人誌「中津川文芸」主宰  
短歌誌「彩雲」代表  
歌集「アルカディアの碧空」「冬陽坂」「山峡—田中冷灰子全歌集」「風をかたち」随筆集「風花」  
画集「時空万華鏡」  
ギャラリー「詩と美術館」経営（現在休業中）



「ヒエロニムスの卵」

中津川文芸

特集・私の好きな場所



2020.秋 復刊 第5号

河林満賞

「しずり雪」

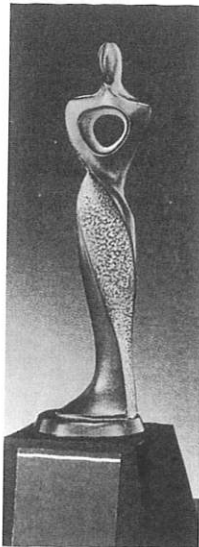
小網春美



小網春美

こあみ はるみ

1947年生まれ  
金沢市在住  
共立女子大学文芸学部卒業  
高校非常勤講師として30年間勤務  
同人誌「北陸文学」などを経て、2019年より「飢餓祭」同人となり、現在に至る



河林満賞

受賞の言葉

小網春美

多分年のせいだと思うが、最近の私の小説は「しずり雪」をはじめとして、死を扱ったものが多い。小説において、その死に深みを持たせるには、生をしっかり描ききらなければならぬ。振り返って自分自身を見つめてみると、最期に、生をしっかりと生ききったと言えるのかどうか。それ次第で死が違った色合いを見せる。書くことを生きがいとしてきた私にとって、河林満賞の受賞は、生きてきた一つの証となりそうだ。  
選考委員の皆様にご心からお礼を申し上げます。

飢餓祭

vol.46  
2020.May



※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援・御協力をお願い申し上げます。

読者賞

受賞の言葉

瀬崎峰永

「負け犬」を書きながら、私を突き動かしていたのは怒りの感情でした。性犯罪被害のなかでも家族など周囲の無理解が被害者をさらに追い詰める、いわゆる「セカンドレイプ」の問題に焦点を当てた短編で、一人でも多くの人に読んでほしいと念じながら七転八倒して書き上げました。

このたび思いがけず「文芸思潮」誌上に掲載していただいたおかげで「ふくやま文学」の読者ではない方々にも本作品を読んでいただく機会を得られましたこと感謝しております。貴誌面をおしてお一人でも多くの方々に本作品をお届けできれば幸いです。

読者賞  
「負け犬」



瀬崎峰永  
せざき ほうえい  
1968 広島県生まれ  
中京大学文学部国文学卒業  
卒業論文は金子光晴詩集  
『人間の悲劇』論  
97「ふくやま文学」参加  
2004年「アビよかえれ」  
で第36回中国短編文学賞  
一席受賞  
20年「カラスどんぶり」  
で第50回九州芸術祭文学  
賞佳作入選

各作品寸評

●「しずり雪」は題材が良いと思いました。今回、どの作品も素晴らしく、実力が伯仲しているように思います。文章だけをとって見れば「夢の岸」の方が上かとは思いました。(山田真己乃)

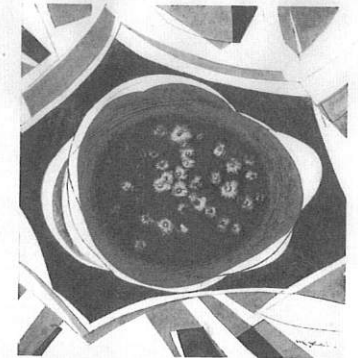
●「破れ蓮」は、圧巻。現代の「楢山節考」である。現代の真の問題がここにある。(木内是壽)

●どれもみんなよかった。「負け犬」は女性にとっては、ちょっと引くところがある。(今田真理子)

●「夢の岸」は、あちらの世界とこちらの世界とを繋ぐ不思議な領域を鮮やかに示してくれている。ほんとうにこんな世界がありそう。魅力がある。極上のワインの味わい。(山口映子)

●「負け犬」はすごい作品。これがどうして「まほろば賞」にならなかったのか、不思議でならない。このインパクトが一番強かった。現実を直視した冷め切った描写は、この作者でなければ書けないものだ。今、こんな作家はいない。これからこの作家には注目したい。次にどんなものが出てくるか大いに期待している。(弓田 肇)

作品名 投票者	負け犬	しずり雪	狐火	夢の岸	破れ蓮
木内是壽					30
今田真理子	6	10	10	10	10
山田真己乃		10			
渡辺恵理	15		20		
西田宏明	50				
渡辺正樹	40			10	
夏目由美			20		
外山寛子			30		
山口映子				20	
渡辺 聡	50				
志村 譲	18				
寒河江仁	31				
弓田 肇	50				
山本雅治	20				
木村弥一	30				
計	310	20	80	40	40



●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は右のような結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。



## 破れ蓮

はちす

飯田 勞

なだらかに伸びる丘陵の中程に作られた小さな溜池。その縁に立つて眼下を望むと、私が住む集落の屋根を越えて扇状に広がる田の中に、若い青色の葉先が整然と並んで、天上に伸びているのが見える。

振り向けば木漏れ日の中、波一つ立たぬ水面の丸い緑の葉群れの中、睡蓮の鮮やかな紅色の花が咲き競っている。時折聞こえる小鳥のさえずりが辺りの静寂を感じさせ、私はそんな周りの雰囲気が好きだった。だから殺してしまつたバアバの遺体をここに沈めようと思つた。そうすることによって私の罪は許され、バアバは清らかな永久の眠りに就けるだろうと信じた。

しかしこの溜池は三年に一度水を抜き底さらいをした。それは地域住民の一家に一人が参加しなければならぬ共同作業の一つだった。稲作を中心とする集団にとっては田植え前の用水の清掃や雑草の刈り取り、はたまた神社の掃除や祭りの準備などと同じ性格のものだった。

もう十年程前のことだったが、その事件のことは今でも寄り合や飲み会の時には必ずといって良いほどに話題に出てきたのだ。よく犬などの小動物の骨があることは皆承知していた。この地域では飼犬などが子を産むと、引き取り手のないものはこの溜池に当然のように放り込まれた。

しかし人骨となると、とは面倒だった。その人物を特定しなければならぬ。勿論それは警察の仕事だが、口さがない連中にとっては絶好の材料だった。色々な憶測が飛び交い、やがて特定の個人に対する中傷誹謗にまで発展した。

事故、自殺、そして他殺。すり鉢状の溜池は縁から底まで防水シートで覆われているが、費用の関係で取り換えもしていないため、その表面は藻などが付着しヌルヌルとした感触で、しかも傾斜があるため大人でも一度滑り込むと岸に上がろうとしても掴む物がなく、爪を立てても滑って喰い込むことも出来ず、無論足の踏ん張りも効かず、そのまま底に引き摺り込まれてしまう。もがくうちに力尽きる、といったことが考えられたし、ましてや気絶させられ突き落されたら、そのまま底に沈んでいくだろう。

その骨は大人のもので傍に大きなリュックがあり、中には大きな石塊が入っていた。まだ残っていた衣服の切れ端から女性だと判明した。すぐ人物の名が口に乗ったのは三十歳後半で夫をなくした女だった。夫は心臓発作で呆気なくこの世を去った。残った女は色白の肉感的な体をしていて。回りの男達が放っておくわけがなかった。女は残った田畑を守りながら、夜は国道脇の小さなスナックのバイトに出た。

女に対する噂はすぐに広まった。どれもが好ましいものではなかった。そして女は舅姑と二人の子を残して姿を消

した。その当時は色男と駆け落ちしたのだろう、と言うもっぱらの評判だった。やがてその方向で一件落着いていた。ところが溜池での人骨騒ぎだ。噂や憶測が再び溜池の底に溜まった泥土が発生させるメタンガスのように湧き上がった。

人々は色情の纏れで殺された、と言う説を有力とし、井戸端会議や酒の肴で犯人探しを始めた。地域で問題の人物もあれば他所のスナックの常連も名が上がった。無論その時期に姿を消した者は第一候補に挙げられた。だから私はバアバの遺体を溜池に沈めることを諦めた。次の底さらいは二年後の初冬にある。その頃はバアバの遺体は白骨化しているようだが、年寄りの骨ということになれば、地域内での住民の安否が疑われかねない。私のバアバはまだ生きていくことになっている。

一歩も家を出ることがなくても、その存在は回りに知れている。

「シゲさん、元気かい？」

近所の人達の挨拶替わりだ。

「アア、最近足腰が弱って難儀しとるが、相変わらず食欲だけは人並み以上だ」

私は平然と笑顔で答える。それだけでバアバはまだ健在だと回りの者は納得する。有り難いことだ。

私は思案の末、溜池から少し下がったところにある蓮田

に埋めることにした。ここは以前は小さな湿地だったらしい。葦などが生えるだけの、足首程沈み込むぬかるみを父が逆手に取ってレンコンを作ることにしたのだ。もとよりレンコンは父の好物だった。減多に台所に立つことのない父であった。春の山菜や秋のきのこ、イワナやアユ釣りによく出掛けたが、収穫したものはそのまま母に料理を命じて、さっさと風呂に入り、出来上がったご馳走に舌鼓を打って酒を飲むのだが、レンコンにかんしてはまったく違っていた。自分で付着した泥を丁寧に洗い落とし、天婦羅や茶わん蒸しにしたり、急にまめまめしく動くのだ。

レンコン掘りは私もよく手伝わされた。ただこの蓮田は粘土質で深く、そのため腰程に掘らなければレンコンは出てこなかった。水抜きした蓮田に入り膝辺りまでとにかく掘って芽を探すのだ。鉄を入れ掘り進んでいくと泥土の中にツクシにも似た黄色味の芽が見える。あとはその芽に添ってさらに掘り下げていくとレンコンの本体にぶつかるのだが、そこからは慎重な作業に変わる。丸く胴長に連なつたレンコンを折ってはならない。表面に傷を付けてはならない。ましてや穴を開けようものなら、そこから泥水が入り込んで喰いものにならなくなる。

小振りの先を平たくした鉄で丁重に回りの泥を取りはぶく。最初は全体像が掴めない。先に伸びるかと思えば逆の方向だったり、腰を折り曲げ、時には両手でレンコンの回りが、高齢化や後継ぎの問題もあり、結局農協に押し切られた。ブルドーザーは、あっ、という間に畦を壊し、百姓の心を押潰した。もうどこが私の田だったか判別もつかなくなった。ただ協同組合の会員という肩書だけが残った。

本来私は農業が嫌いだった。と言うよりは汗水垂らしての肉体労働が嫌いだった。ただダラダラと自分の好きなことをして暮らしたかった。今はパチンコとカラオケか。小さい頃から父親に逆らうことが出来ず畑仕事を手伝わされた。気持が乗らないためか、いつも怒鳴られっぱなしだった。高校を卒業して親戚の経営する小さな鉄工所に就職した。父親にすれば農繁期には休みが取りやすい、と考えたのだろう。私にすれば迷惑な話だった。しかし父に逆らうことは一切なかった。鉄工所では何年も雑用ばかりだった。

父が死ぬと重い責任のない鉄工所の仕事が辞められなくなった。不思議なものだ。見えぬ父の重圧があったのかもしれない。田畑の仕事は母が頑張りはじめた。私は嫌々手伝ったが父とは違った軽さがあった。母にも息子に対する遠慮があったのかも知れない。母は姉よりもことさら私を可愛がっていたから。だから私自身からすれば今度の農地整備事業は内心両手を上げての賛成だった。

蓮田は離れた高台にあったため難を逃れた。それはレンコンを作る以外には何の利用価値もないものだった。私は

りの土をえぐり取る。おまけに季節は十一月頃から翌年の三月頃まで。気温は寒く土は冷たい。厚手のビニールの手袋は指先に余計冷たさを感じさせる。指先がかじかむ。

それでも傷もつけず折れもせず一本掘り上げた時の充実感には気持ちのよいものだ。最後に泥の中から両手で抱きかかえるようにして持ち上げる時、父は、処女を抱き起こす感じだ、と子供の前で億面もなく笑った。確かに黒茶の泥土の中から現れるレンコンの肌の白さは若い女の柔肌に見えると思つた。だからかも知れない。田畑の仕事は嫌いだったが、私はそんなレンコン掘りだけは好きだった。それだけは父と似ていた。そんな蓮田に私はバアバを埋めた。

父が死ぬと長男というだけで当然のように私は田畑を引き継がされた。しかし今はこの蓮田しか残っていないかった。田畑は農協に取られたようなものだった。以前から噂に登っていた農地整備事業の話が具体化したのだ。昔のような小さな田では近代的な農業は出来ない。田を広くして大型機械を導入して効率化を図らなければならない。そのためには協同組合を作り、皆が会員となって田畑を提供する。その上で耕地整理を行い、やる気のある人に一括して稲作をやってもらう。

国策だそうで補助金も出る。皆百姓しなくても協同組合からは提出した農地の面積に応じた金額が出る。しかし提示された額は驚く程に低かった。反対する人も当然いた。その季節になるとレンコンを掘り農協に卸した。私ができる現金収入はその代金と協同組合からの金だけだった。決して年間喰っていきける額ではなかった。だからバアバの年金は貴重だった。毎日偶数月に振り込まれるのを待った。だから私はバアバを大事にした。しかし殺してしまった。

春には泥田の中から青い芽が伸びた。最初小さな浮き草のような幼草は、やがて季節の変わり目と共に成長し、初夏には大皿を天上に向けたような緑色の蓮葉が重なり合い、その間から突き出て両手をまるく合掌させた薄紅色の蕾が出来、やがて紅色となって花開いた。私はいつもその時期になると、母が信仰する観音様の姿をその花卉の上を探し求めた。その時よもやここにバアバを埋めようとは思いつかなかった。

レンコンを掘る作業は肉体労働そのものだった。ただこの仕事だけはなぜか苦にならなかった。一心不乱に泥土を掘り起こす。他の地域では腰程まで浸かって、ポンプの水圧を利用して土を飛ばしレンコンを収穫していた。しかし一つしかない私の田は、そんな設備に金を掛ける価値もなかった。それ以上に私には自分の手で掘ることの方が重要だった。父は掘り上げる行為を処女を抱き起こす感じがする、と言った。初めて女性の体を抱いた時、私はその肌を愛撫する指先の動きに父の言葉の意味を知った。

父は農家の三男坊だった。早くから家を出た。それは口

減らしだと父は言った。だからその年齢に達した時、陸軍に志願した。大東亜戦争突入まもなくのことだった。満州、東アジア。どうにか生き延びた。復員し故郷に戻った。兄も次の兄も戦死していた。父は農家の跡を継ぎ、兄嫁もそのまま自分の嫁とした。私の母だった。どこにでもある話だと父は笑った。母は今更といった顔で、戻る家もなかったし、と無表情に呟いた。さらに、どうせ田圃の牛ぐらいにしか思われてなかったのよ、と付け加えた。

母は姉と私を生み育てた。嫁姑の確執。夫は無関心。家事そして田畑の作業。舅姑が他界してはじめて家での存在を確保した。姉が嫁ぐ時、あちらの人達に可愛がってもらえよ、と言った言葉を横で聞いた。そして私に言うともなく、私も良い姑にならなくっちゃね、と喜々とした笑顔を見せた。実際にはそう上手くはいかなかった。

妻とは鉄工所時代に知り合った。家族だけの小さな工具店の娘だった。工具や軍手といった消耗品など、それにネジ一本でもすぐに納品してくれた。いつもは店の親父が届けに来たが、手の回らぬ時は娘が配達に来た。受け取るのは私の仕事だった。仕事仲間からは、手だけは早いな、とからかわれた。どこにでもいそうな、これといって特徴のない平凡な女だった。ただ二人は若かった。異性との付き合い。それだけが目的だったのかも知れない。溜池の裏に広がる雑木林は二人の逢引には取っておきの場所だった。

だった。

異変が起きたのは父の葬儀が終わったその晩からだ。父について、それまで胃ガンだとは思いつかなかった。

兆候は食欲がなくなってきたことだった。酒も進まなくなった。それだけのことだった。病院でガンが見つかった時には、すでに手遅れの状態だった。入院二か月余りで父はこの世を去った。

慌だしい通夜、そして葬儀。父の遺骨を抱いて家に戻ったのは六時近くだった。私は風呂に入っていた。急に妻の声と共にドアが開いた。

「お父さん、チョット」

私は急ぎ風呂場を出ると妻の後に従った。妻は廊下に立つと居間を覗き込み、その視線を私の方に向けた。私は誘われるまま居間を覗き込んだ。今迄父が座っていた座敷机の場所に母が座っていた。中陰で持ち帰った折り箱を広げ、コップ酒をおおっていたのだ。その姿はまるで父がバアバに乗り移ったかとも思われた。

「今日のご苦労だったね。われもここにきて一緒に飲めや」  
言葉使いも一緒だった。妻の顔が青ざめていた。

翌日は昼近くまで寝ていた。起きてからの第一声が、昨夜から何も喰ってない、だった。次から次と辻褃の合わない言動が続いた。医者には、極度の緊張から解き放たれた気の緩みだろう、一時的なものだからしばらく様子を見ては、

その頃から農家の長男が嫁を取るのには難しくなっていた。誰が好んで農業などしたいものか。妊娠が後押ししてくれた。皆が祝福してくれた。母もその時は喜んでくれたのだが。

姉は既に嫁いでいたし、長男だということで当り前のように同居した。

——良い姑にならなくっちゃね——

確かそう口にしたはずだった。しかし自分が今まで受けた遺恨返しでもするかのように母は変わった。私は嫁と母の間に立たされ右往左往することになった。父はどんな時でも介入することはなかった。

私が母親のことをバアバと呼ぶようになったのはいつ頃からだろう。妻が最初の子を産んだ時から母親はオバアチャンと呼ばれ、私も父や母のことをジイジ、バアバといっしか呼んでいたような気がする。呼び方はどうであれ嫁姑との間が良くなることはなかった。

ただその時点ではまだバアバを恨むことはなかった。バアバに対する妻の攻撃的な悪口を聞きなだめ、バアバのくどくどしい口説きを聞き、治めにかかった。互いが罵り合うことはなかった。それぞれが私を仲介して言い争った。あちらを立てればこちらが立たず、こちらを立てればあちらが立たず、所詮決論の出ぬことばかりだった。しかしそんな争いはまだバアバが自分のことは自分で出来たから

と答えた。一週間二週間、一向に改善する見込みはなかった。

私は腰まで隠れる程の穴を掘り、レンコンの芽を探した。一鍬一鍬掘り起こし進む。粘りけのある泥はその都度鍬の刃の部分にひつつき、時々掌で掻き落とす。やがて黄色味を帯びた薄茶の芽が取り除いた泥の中から跳ねるように出てくる。私は鍬を小振りの細く小さなものに替え、さらにその芽の下を掘り進む。やがて泥の一部が剥がれるように起き、レンコンの肌が現れる。

今度はその回りを慎重にえぐり取る。徐々に細長い全体像が露わになる。傷つけぬよう、さらには節々で折らぬよう神経を集中する。この時ばかりはバアバのことも妻のことも忘れる。だからこそ私はその作業に熱中するのも知れない。父の場合はそんな時大声で叫びながら手を動かす。

「これはでかいぞ。しかも太い。儂の負けじゃ」

「なんじゃ、これは。鉛筆の芯か。せっかく掘ってこれか」  
しかし私は無言で手を動かす。女性の肌を愛撫するかのように。膺の中でうごめかす指先のように。

私と妻の間は良好な関係だった。新婚時代は無論のこと、それ以後も二人の時は幸せだった。そう二人の時だけは。同居という形が嫁姑の問題を生じさせていた。どここの家庭でも起こる現象だ、と他人に対しては言えたが、いざ



自分達のこととなると深刻な話だった。

母も若い頃は嫁の立場として身に染みたことに違いなかった。子供心にも裏にある物置小屋の影で泣いている母の姿を見、言葉なく立ち尽くしていたこともあった。ただその当時はその原因がなんであるか知る由もなかったが、その母が今度は逆の立場になって私達夫婦の間に割りこんできた。

子供が産まれた時、妻はいよいよ別居の話を切り出してきた。小さいアパートでいい、もし嫌なら私と子供だけでも。切羽詰ったことだろう。しかし私の小規模な鉄工所での給料は少なかつたし、ボーナスもほんの寸志程度のもので、妻のパートの収入は欠かせなかつた。ましてや育児に関して母の協力は不可能に近かつた。妻は一時パートを辞めざるをえなかつた。さらには家に残れば少なくとも水道光熱費や米や野菜などの食費代も考えなくてよかつた。結局別居は諦めざるをえなかつた。私は不甲斐ない亭主だつた。妻と子供は本当に必要な時以外はほとんど二階ですごしていた。私は妻の口が動く度に無言でやり過ぎすか、謝り、ご機嫌を取ることしか出来なかつた。

ある晩の一言で妻と子は翌朝から食事を二階で済ますようになつた。元々妻は食事のさいテレビを点けることを好まなかつた。対して我が家ではテレビを見ながらの食事だつた。再三妻はそのことを私に対して、子供の躰けによつてとテレビを見ながら「ゆっくり」と

「あなたはいつもの所に用意してありますから、あの人とテレビを見ながら三食食べさせてる？」

町会の会議が終わり集会場を出ようとした時、民生委員と町会長に呼び止められた。

「松ちゃん、ばあさんに三食食べさせてる？」  
一瞬何のことかと思つた。確かに妻と母の仲は悪かつたが、食事に関しては私との二人分、相変わらず居間に用意してあつたし、実際私は母と相対して食事を共にしていた。母は呆けたといつても食欲だけは旺盛で、時には私の分も電子レンジで暖めてくれたし、食器洗いもしてくれた。

「いや、先日農の所に来て、嫁が食事を作ってくれんから腹ペコや、云つて農のカカが飯食わせて帰したそうや」

私は嘩然としながら、そんな馬鹿な、と否定した。帰るなり母に詰問したが、知らぬ顔であつた。ただその噂話だけは瞬く間に広がり、やがて妻の耳にも届いた。「これからはあの人の食事、あなたが作つてね」

私はこの時も拝むように、今迄通りにと、ただ頭を下げるだけだつた。母はその後もあることを近所に触

くない、と不満を漏らしていた。私は、昔からこうだつたから父や母は承知すまい、と答えるしかなかつた。

父が死に食卓への人数は減つたが、相変わらずテレビを点けての食事だつた。その日は子供の誕生日だつた。好物が並べられケーキが出た。それは私の子供の頃にはなかつた光景だつた。私の心も浮わつていた。その反面母は無口であつた。ハッピーバースデーの歌が流れローソクが消された。私達は笑顔で拍手を送つた。その瞬間だつた。

「うるさいね。テレビが聞こえやしない」

怒鳴り声だつた。私達家族は固まつた。母は何事もなかつたかのようにテレビの方に顔を向けながら酒を口に持つていった。

妻は黙つて立ち上がるとケーキを持ち、子供の手を引くと二階へ上がつていった。私はその後ろ姿を見詰めながらただ座つていた。残るべきか一緒に二階へ行くべきか迷いながら。

翌朝いつものテーブルの上には母と私の二人分の朝食が用意されていた。一瞬私の頭に血が昇つた。私は二階へ駆け登つた。妻が私の方に視線も向けず子供と食事をしていてた。

「一体どういふことだ」

私は怒鳴つた。妻は無言であつた。子が泣いた。妻は静かに音もたてず味噌汁をすすつた。そのことが益々怒りを

れ回つた。私はその都度釈明に追われ、ある時は深刻そうな表情を作り、ある時は冗談めいた会話で逃げ、ある時は無視した。

ある晩のことだつた。階下から異様な物音と共に奇妙な叫び声が聞こえた。私は直感的に母の部屋に走つた。障子戸を勢いよく開けた。部屋中が布団や衣服で散乱していた。一瞬何事が起きたのか想像できなかつた。私は部屋に入った。母の姿が見えなかつた。私は思わず大声を上げた。

「バアバ、どこや」

意味不明の唸り声にも似た声が入れから響いていた。大型の野生動物のような気配だつた。私は再び、バアバどこや、と怒鳴つた。と押入れから母が顔を出した。大きく見開いた両眼が不気味に輝いていた。

「押入れの中に女の子の死体がある。早く取り出さないと腐つてしまふ」

「女の子の死体？」

私は有り得ない話しに愕然となり、母を見詰めた。

「ここじゃ、ここじゃ」

母は再び押入れの中に這いずつていった。何かが放り出された。それはもう使わなくなつた大きな枕だつた。母が続いて顔を出した。

「恐ろしや、恐ろしや。ナンマイダ、ナンマイダ」

私はその枕をまじまじと見やつた。

「これが女の子の死体?——  
ふと廊下に立ち尽くす妻の姿を見つけると、私はその枕をかざした。

「女の子の死体だと」

そしてすぐに言わなければよかったと思った。どうしてそんなことを言ったのだろう。その時私の表情は微笑みさえ浮かべていたかもしれない。妻は枕を見詰め、そして母の方に怯えた視線を送った。

母は荒い息使いで眠るかのようにその場に横たわっていた。妻は黙ったまま踵を返した。残された私は散乱した衣服や衣装ケースを片隅に押しやると、荒れた布団を引き直し母を寝かせた。母は素直に床に入ると何事もなかったかのように寝息を立てた。しかしその顔は能面のように色白く、口はだらしなく開いていた。赤い舌先だけが出たり入ったりしていた。

その後母は毎夜一時頃になると同じ騒ぎを繰り返した。女の子の死体であったり、人間程の大きさの猫であったり、時には大男が母に寄り添うように寝ていたりした。私達夫婦は寝不足になり、妻はパートへの出勤途中に追突事故を起こした。大きな事故にはならなかったが双方のバンパーが破損し、相手の運転手は鞭打ちと診断され、しばらくの通院を言い渡された。妻に異常がないのは幸いだっただ。事故の瞬間居眠りをしていただった。

ジャーなる女性が訪問し、面接と簡単な試験が行われた。日頃何事にも深い興味を見せぬ母が真剣な表情で取り組んでいた。やはり呆けてはいても自分を良く見せたい、という心裏が働いていたのかも知れない。結果は「要介護三」の認定だった。

一度デイサービスを利用してみないか、との提案があった。日中数時間であっても母がいない、ということとは有り難いことだった。妻は黙って用意をしてくれた。内心これが上手くいけば夫婦のよりも戻るかもしれないと思えた。しかし結果は惨憺たるものだった。

デイサービスから来た迎えの車に乗ることに母は激しく抵抗した。結局私が連れて行くことにした。

「同じ年の仲間が大勢いて楽しい所やぞ」

母は渋々同意した。私は母をデイサービスに届けた。職員の人達は笑顔で母を迎え、母は不安気な眼差しで私を見送った。私の心はそれだけでも軽くなったように思われ、そのままパチンコ店に向かった。

一時間も経たぬうちにスマホの着信音が鳴った。それは店内に流れる音楽や玉の弾ける音よりも激しいものに感じられた。私はスマホを手を外に出た。デイサービスからだった。

「わかりました。すぐお伺いします」

母が職員に対して暴力を振るったのだ。にわかには信じ

その頃私はすでに親戚の鉄工所を辞めていた。定職につきくこともなく畑仕事などをして日中を過ごしていたので昼寝は充分に取れた。それでも毎晩発作にも似た母の行動には肉体的には無論のこと、寝ていてもいつ何時母の奇声が聞こえてくるかと熟睡も出来ず、精神的にはきついなものがあつた。他人に愚痴をこぼしても「そりゃ大変だね」と口では軽く、真剣に聞いてくれる者はいなかった。身内である姉でさえが、いやむしろその近親で一番近きがゆえに、母の狂態を信じようとはしなかった。それでいて一度泊まりに来るか、それとも母親をそつちで一泊させる、と言えば、口を濁した。

ようやく私は母を騙すようにして病院に連れていった。医者はこれといった診察もせず一言「ルビー小体痴呆症」と言った。

「目に見えないものが見えたり人物が見えたり、他のものに見えたり、たとえば庭石を猫と間違えたり、人形を本物の子供と思ったり。脳細胞の萎縮からくるものです」

——ルビー小体痴呆症——

私はその言葉に、あの宝石のルビーを思い出していた。確かに異常な興奮の時の目一杯に開かれた母の両眼の奥には、紅に輝く光が燃えていた。

医者は精神安定剤と睡眠薬を渡してくれ、ついでに役所での介護認定の方法も教えてくれた。後日ケアマネーられぬことだった。私は一瞬デイサービスの職員が悪いのではなかるうか、と彼や彼女を疑った。しかし噛みつかれたというその傷跡を見て、私は納得せざるを得なかった。しかも母は私にまで足蹴りをしかけたのだ。私は狼狽し、ただ口先だけで諫めながら母を車に乗せた。今から家に戻る、と言うと母は急に落ち付きを取り戻し、涙声で叫んだ。

「私が何悪いことした言うの。なんであんなところ行かんといかんの」

そこは母にとっては耐え難い場所だったのかも知れない。私は母に対して済まないことをしたと思った。そしてデイサービスの利用を止めた。

私の家には洗濯機が三台並んでいる。全自動のものが二台、二層式のもの一台。昔は一台だったものが妻の嫁入り道具の一台が増えて二台となった。妻は自分が持つてきた洗濯機で私と自分との洗いの物をした。母は一貫して従来

の二層式だった。

娘が大きくなって妻はもう一台ほしい、と言いだした。理由は簡単なことだった。新しく買った洗濯機は妻と娘専用になった。娘に嫌われているのは充分承知していた。私は思わず二の腕辺りの臭いを嗅いだ。別に何も感じなかった。

今でも母は気丈夫に自分のものは相変わらず二層式の洗

濯機で洗っている。寝ては起き、起きては飯を食う、そういう習慣の一部に洗濯も組み込まれているのだろうか。しかしすすぎ洗いが終わり、隣りの脱水槽に入れ、バランスも取らずぶん回す。ドラムがぶれて激しい音をたてる。やがて非常停止、なす術を忘れ濡れたままの洗濯物をそのまま縁側に吊るす。床に水が滴り落ち、そこをまた歩いて足裏を濡らすのだが拭こうともせず、あちこちを歩き回る。私は雑巾をもって走り回る。妻はいつも見て見ぬ振り、いや秘かにほくそ笑んでいる。

妻が家を出たのは当然のことのように思えた。私は何一つ妻と娘の支えにはならなかった。その頃から私は母が貰う年金と父が残した軍人恩給を生活費として妻に渡し畑仕事は真似事で、時折近所の日雇いのような仕事をすする以外は日中パチンコに興じていた。妻はパートに出ている。それが月に幾らの収入になるのか私は知らない。ただ楽でない生活であることは間違いない。いつしか妻との会話は少なくなっていた。時として妻と一言も交わさぬ日もあったし、ましてや娘となると顔さえ見ぬこともあった。母の徘徊が激しくなると私は忙しくなった。一体どこへ行ったのか見当もつかない。ただ昔ながらの閉鎖された小さな地区は有り難かった。人がいないようでも随所に住民の目が光っていた。

また今日に限っては昔に戻ったように愛想がよかった。傍目には仲の良い夫婦、幸せな家庭と見えたことだろう。心地よい酔いが一層その思いを強くした。

ただそれは家に戻るまでのことだった。玄関を開けた途端、妻の表情が一変した。異様な臭いが吹き出して来た。私は思わずその臭いを嗅ぎ、慌てて手で鼻と口を塞いだ。娘は二三歩遠のいた。妻はすぐに事情を察したようだった。妻の行動は早かった。すぐに二階へ上がっていった。私は立ち尽くしたままだった。

「今度は何をやらかした?」  
 それでいて家中から発するその臭いに私はその惨状を思い描いていた。だからどう対処していいか動揺していた。妻が普段の服に着替え、降りてきた。

「あなた、すぐお風呂沸かして」  
 強い口調だった。私は台所に隣接する風呂場に向かおうとした。

「ムッ」  
 私は立ち止まった。廊下に臭いの発生源となる黄色い汚物が点転と連なっていた。しかもその先にはその一つを手を取ってこね回している母の姿があった。それは信じがたい、出来れば息子として見たくない姿だった。動かぬ私に再度風呂を沸かす命令が下された。  
 灯油ポイラーが唸った。私は蛇口を捻った。水流が勢い

「シゲさんなら今しがた前を通ったよ」

「横田のバアサンの家にしたよ」

ただそれと同時に苦情も入ってきた。

「うちの飼いの犬の鎖、外して困る」

「勝手に田圃に用水の水を引き入れて迷惑だ」

私は母を連れ戻すと早速謝りに出掛ける。どれだけ言い聞かせても本人に通じる話ではない。ただ、ハイハイ、と口にするだけで、次の瞬間には総てを忘れていた。泣きたくなくてくる。だから何もしてくれない妻に逆恨みする。思わず声を荒げる。意味なく娘を叱る。結果言い争いになる。妻が飯を作らなくなると、私は三食コンビニに母と二人分の弁当を買いに行く。かなりの出費に私は妻に頭を下げざるを得ない。

もう妻は別居しようとか、私とお母さんどっちが大事なの、とか言わなくなった。私にとっては有り難いことだったが、それに相当する不安もあった。そしてその不安がある目的中したのだ。

中学入学の日、久し振りに妻の晴れ着姿を見た。新調の生地を表が艶々した制服を着た娘と連れだって学校に向かう後姿を、私はただ見惚れていた。夜は三人して夕食に出掛けた。娘とのそんな一時は久しくなかったことだった。妻は始終笑顔だった。何十年振りに見る和らいだ表情に私は思わず晴れ着のままの妻を抱いてみたいと思った。妻も

よく湯船の底を叩いた。湯面の上昇が遅く感じられた。私はまだ一方の水の出る蛇口も捻り何度も手を突っ込み温度を確認した。

妻は真つ先に母の両手を掬った湯で洗った。次にその場で母を裸にすると下半身に湯を掛けた。母は一言も発せず背を丸め視線を落としたままだった。これまで敵対していた相手に、老いたとはいえ女性の部分を洗ってもらおうという事実を母はどう思っているのだろうか。あるいはそんなことさえ無関心になる程痴呆は進んでいるのだろうか。

妻の仕草はまるで幼児を扱うように優しくかった。そんな態度を私は初めて見る思いだった。母は言われるままに股間を広げ、妻は何度も湯を掛けながら汚れを洗った。湯気の中に妙な臭味が混じった。それは私にとつては耐え難いものだった。それでいて私は洗い場の戸口に立ち、ただ見詰めていた。母に対する心配も妻に対する同情もなかった。やがてその部分を洗い終えると妻は母の背に湯を掛け、湯船の中に入るように、また優しい声で言った。母は柔順に従った。

妻は立ちはだかる私の横を擦り抜けると母の部屋の方に向かった。私は湯に肩までつかる母を一瞥すると妻の後を追った。庭に面したアルミ戸や窓が全開された。入り込む夜の冷気が辺りに漂う臭気を拡散し薄めた。妻は大量の雑巾とビニール袋を持ち出した。廊下に散乱した固形のもの



はそのまま包みこみ、汚水を拭き取り、私には眼も触れず何度も雑巾を濯いだバケツの水を取り換えに走った。私はなす術を知らずオロオロと妻の後を追った。私に対して一言も口をきかぬ態度が一層不安を増大させた。愚痴の一つも言ってくれたほうがどんなに有り難かったらう。

やがて妻は必要以上の消臭液を母の部屋といわず廊下や台所に噴霧した。その量は私をむせかえす程だった。あるいは母や私に直接吹き掛けたかったのかも知れない。一段落すると妻は休むことなく風呂場に戻った。母を湯の中から出すと洗い場に座らせ、その背と胸を洗った。妻は涙ぐんでいた。なぜ泣くのだろう。母のウンコ垂れの哀れな姿に涙したのだろうか。そうであるなら母と妻の今迄の陰悪な状態が今度の事件で一步でも近づく機会となったのである。私は思い願った。しかしその二か月後、妻は娘と共に家を出た。

農協主催の一泊二日の旅行から帰った夕方のことだった。台所のテーブルの上に私の名が記されただけの一通の封筒があった。取り上げ、裏を見ると妻の名があった。封はされていなかった。私は土産物を置くと中を覗いた。不安が頭をもたげた。中身を取り出した。妻の字だろうと思った。久しく妻の書体を見たことがなかった。

娘と二人家を出る、と書いてあった。同封の離婚届けに印を押して下さい、と空白の氏名欄の箇所エンピツで細かく書かれた。——  
——何に対する、御苦労さま、だったのだろう。兄に対する今日一日の無駄な労働に対して。それとも姿を見せなかった妻に対して? ——

二台のトラックが去ると私は二階上がった。見事に私のものを残して何もかも運び出されていた。二ヶ月間は周到な準備期間だったのだろう。母と娘は深刻な表情で荷を作ったのだろうか。  
——あるいは長期の旅行の楽しみに期待を膨らませるかのよう、笑顔で語り合い、時には額をくっつけ頬を擦りながら、楽しんだのであろうか ——

壁と畳に残された白っぽく区切られた跡は、如実にいなくなつた妻と娘の实在空間の証しのように思えた。私は力なく階段を降りた。

母の部屋を覗くと、テレビに見やっていた視線を私の方向に向け、腹減つた飯食わせ、と怒鳴った。私は思わず、さつき喰つたばかりじゃ、と声を張り上げた。

「儂や、朝から何も喰わしてもららん」

母は再び叫ぶと両眼を一杯に広げ、まばらに残つた黄色い菌並びを見せた。これからこのバアバと二人っきりの生活を始めなければならないのか。私は思わず目を逸らした。

長い円で囲みがあった。そこに私の名を書き捺印しろ、と言うことだろうと思つた。娘の親権は譲れません、その替わり他の一切の請求はいたしません。とも書かれてあつた。汚物にまみれた母の体を洗いながら涙したのは、あるいは私との別れを決意した瞬間ではなからうか。ごめんさい、とかの言葉を期待するほうが無理なのかもしれない。決して良い亭主ではなかった。いや、最初から別居していればまた違った亭主になっていたかもしれない。虚しい言い訳にすぎないか。

二週間後に妻の兄が数人の男と共にトラック二台でやってきた。工具店の跡を継いで鉄工所時代は顔馴染みだった。まだ妻と付き合う以前は気さくな感じだった。やがて愛想の悪い人物となつた。最初から妹の相手としての私を気に喰わなかつたのであろう。鉄工所を辞めてからは葬式や法事の時だけの、それも挨拶程度の会話しかなかった。

互いに顔を背けるように頭を下げあうと、妻の兄はすぐに男達を動かした。まるでよく訓練された兵士のように彼等は迅速に行動した。たちまちのうちに二台のトラックは妻と娘の道具で満載になった。あの自動洗濯機も当然積み込まれた。私はその一部始終を見つめていた。そして終了したことを確認すると、離婚届の入つた封筒を手渡した。

兄は中身を取り出すと私のサインと捺印を確かめ、再び封筒に入れると、確かに、と力強い口調で言った。私は、御

これまで家事については、まったく手を出したことがなかった。私は炊飯器の使い方も、二台残つた洗濯機の全自動のものもどう操作してよいかわからなかつた。二層式の方は動かすことは出来たが、運転時間を何十分に設定するのか、洗濯粉をどれ位投入するのか見当もつかなかつた。姉に電話すると、電話ではらちがあかぬ、と飛んで来てくれ、あれこれ説明し、さらには操作の順番をメモしてくれ、実際にの前で実演さえしてくれた。ついでに二人分の夕食まで作つて帰つて行つたが、最後までバアバを引き取ってもらつてという言葉はなかつた。しかしバアバを引き取つてもらつては私の方が困ることになる。私の生活費はすでにバアバの年金だけが頼りなのだ。畑の収穫物など農協におろす程もなく、せいぜいレンコンが金になるだけだった。それにしても季節ものである以上そんなに当てる金ではなかつた。

「お母さんをお願いね」

そう言つて姉は帰つて行く。その後も最初の頃は二人の生活を心配してか、月に二度程顔を出したが、やがては月に一度になり三月に一度となつた。兄弟親戚とは言つても所詮自分達の生活が第一優先で、楽しいことなり金になることなら喜んで来ようが、中年の独身男とみすばらしい老婆の家など近寄りたくもなからう。

部屋の隅には埃が溜まり、私の部屋もバアバの部屋も万

年床で、特にバアバの部屋は障子戸を開けた瞬間に小便臭さが溢れ出た。台所はインスタント食品の包装や、トレイが詰め込まれたマーケットのビニール袋が山積みされ、空のペットボトルが散乱していた。かろうじて歩けるスペースの廊下は足の裏が粘っていた。

風呂は普段はシャワーだけだった。バアバは体から酸っぱい臭いを感じられた時、暖かい日中に風呂を沸かした。脊筋がやや左に曲がった、皮膚と骨とが分離した皺だらけの体だった。私はことさら丁寧**に**バアバの陰部を洗った。陰毛も失せたその箇所は、まるで干柿のように茶色く隆起さえなかった。私がそこから産まれ出た、という感慨めいたものは起こりもしなかった。ケツの回りには糞のカスがこびり付いていた。強いシャワーを当てわざと指先で擦り剥いた。自分が腹を痛めた子に陰部を洗われる気持ちほどんなものなのだろう。バアバは臍抜けた様で黙したままだった。一度棒切れでも突っ込んでみようかと思った。

しかし私は世間体だけはよく見せようと思った。天気の良い日はバアバを車椅子に乗せ、近所を回り田や畑、そして天気の良い日には近くのショッピングセンターに連れて行き、子供向けのショーやペットショップコーナーを回り、帰りにマ켓で買い物させた。その中身は弁当の類、ジュースや日持ちのするお菓子。

そんな私の姿を見て近所の皆は、いつも大変ね、と労わ

りの言葉を掛けてくる。私は、別にそんなこと……と照れる振りを見せる。そして心の中で毒づく。

——口ではどうにでも言えるよな——

皆言葉だけの思いやりで手を貸す者はいない。でも逆の立場だったら私も結局は他人事で済ますはずだ。実際誰が他人の老婆の下の世話までしてくれよう。掌にズシリと重い紙おむつを取り換える。小便はただ取り換えるだけでいいが、黙って出した大便是尻の皺の中にまで入り込む。ティッシュを何枚も重ねて拭きとり、異臭に顔を背けながら濡らしたタオルで拭き取る。そんなことを誰が好んでしてくれよう。その度にバアバを介護施設に入れようと思う。現にそう進めてくれる人もいる。しかしそのための毎月の費用を見ると私の生活が貧窮する。

一度だけ妻が働いていたパート先に様子を窺いに行ったことがある。店を覗いてみたが、妻の姿はなかった。中に入りその安否を聞くことには躊躇いがあった。二度ばかり店の前を行き来し、すぐごと帰った。娘の学校へはさすがに行けなかった。妻と娘が現在どこに住ましているのかは無論知らされてはいなかった。電話をかける勇氣もなかった。ただ電話帳を開き妻のスマホの番号を見詰めた。

蓮田の泥の中に腕を突っ込み、茶色味を帯びた木目の細かい表皮のレンコンを掘り起こす度に、妻の白い肌を思い出した。ふくよかな乳房に走る静脈の青、ほんのりと上気

する首元の肌色、充血し色づく秘部の赤。もう十年以上妻を抱くことはなかった。妻からの要求もなかった。だがそのことが別れる理由でないことは明白な事実だった。総てがバアバの存在だと私は確信していた。バアバさえいなければ私達夫婦は円満だったろうし、また娘も私に懐いてくれたに相違ない。私は繰り返すようにその思いを反芻した。

私はその日ホームセンターで鍵を買ってきた。安価なもので充分だった。何しろ個数が多かった。簡単なものだった。ガラス面にそれを張り付ける。レバーの端を押すと反対側が上がり、もう一方のガラス枠の棧に当たり、開けることが出来ない。機能的に単純なもので元々は内鍵の二重ロックに使用するものなのだが、私の場合それを玄関や一階の総ての引き違い戸や窓の外側に貼り付けた。

バアバの幻覚は相変わらずだった。大きな蛇が布団の中に入ってきた。子供達が庭の土を掘り起こしている。他人が聞いて本気にすれば飛び上がるような話にも、私はもう慣れきってしまった。すべて、それは大変だね、と慰める口調でバアバを黙らせた。ただ困ったのはバアバの徘徊癖が激しくなったことだった。必ず家には戻って来たので、そのことに関しては心配なかったが、子供時代に戻ったのか、よそ様の田畑に入って出てきたばかりの芽を引き抜いたり、池の魚を取ってきたり。その都度私は謝りに出掛け

た。どういった思いでか、手に余る程の石を抱えてくることもあった。さすがにその重さに戻す気は起こらず、庭の隅に捨て置いた。どんなふうにあんな重い石を運んだのだろう。今でもその石を見るたびに不思議でならない。

そこで私は外出の際、家の総ての戸や窓に施錠することにした。しかしそれは内鍵だったし、玄関の鍵は外から閉じても内側と連動していたから簡単に開けることが出来た。痴果とはいえ過去の生活習慣のすべてが衰えているわけではない。だから私はバアバが外に出られぬよう、外側に鍵を付けたのだ。流石に二階の窓からは出まい、と思っただが念のためにと釘を打った。もう私にとっては必要のない二階部分ではあったが、逆にそのことがそういった意味のない行動を促したのかも知れない。とにかくこれで私は安心してパチンコや蓮田に集中することが出来た。

しかし密封された家は空気の流れが停滞した。カビ臭い匂いはまだ我慢出来たが、バアバの寝起きする部屋から漏れ出る、あの妙に生暖かい感じのする便の臭いだけは我慢出来なかった。でもそれには理由があった。時々夜中など尿意をもよおしても素早い行動が取れない。結局途中で漏らしてしまうのだが、無論後始末をする訳でもない。それを知らずに便所に向かう私は足裏に濡れた感触を味わうのである。だから私はポータブルトイレをバアバの部屋に置いた。

ただ朝と夕方の二度、そのポータブルトイレの中身をトイレに流す仕事が増えた。それは廊下からトイレまで臭気を拡散する行為だった。私は片手にポータブルのパケツを、片手に消臭剤のスプレーを持ち、噴霧しながら歩いた。そうして中の汚物をトイレに落とし込み素早く水で流すのだが、どうしても臭いが立ち登った。時折大便まで混じっていることがあった。年寄りのくせに私のより太く重い。おまけに運動などせずただ寝ては食う生活のせいだろうか、その臭さは小便の比ではない。迂闊にもその跳ね返りが顔に当たろうものなら、惨めさと共に怒りが生じ、バアバに排泄物を頭からぶっ掛けてやるかと思う。しかしその後処理を思うと、私は結局バアバの下腹部に香り爽やか消臭スプレーを噴射する。四五回たつぷりと。バアバは腰を引き、キヤツキヤ、と笑った。

満ちる程に水を張った田に整然と並び植えられた苗の風景を見るのを私は好きだった。今では自分の田ではなくなっても、変わることはなかった。農地整備事業という国策に添って農協主体の組合に私達農家は安い金で田畑を手放した。手元に残ったのは組合員という肩書だけだった。私はかつて自分の土地だった辺りを見やる。確かに広々とした区画の水田が広がっていた。

私はその足で蓮田の方へ向かった。そろそろ肥料も入る。私は再び走った。ようやく田の広がる所に立った。バアバは遠い先を相変わらず歩き続けている。家での様子は仮の姿だったのだろうか。私は幾度も立ち止まり深く息を吸い、同じ数だけ息を吐くと、今度は畦道を走った。最初は軽トラックが通れるだけの十分な幅があった。しかしバアバは今人が辛うじて擦れ違うことの出来る、はるか遠くにいる。

畦道は舗装もされていない土塊の道だ。時折私の足が纏れ、つんのめり倒れそうになる。これも日頃ろくな運動もせずバチンコ台を見詰めている報いか。それでもバアバとの年齢差体力差がその距離を確実に狭めていた。走りながら顔を向け、バアバの姿を確認する。そして私はバアバが歩いていると同じ幅の狭さの畦道に入る。途中何度か折れ曲った。ようやく直線の先にバアバの背が見えた。そこで私は迂闊にも声を張り上げてしまった。

「バアバ、止まれ。戻ってこい」

バアバは立ち止り体を振った。暫くの間私の方を見詰めていた。バアバは声の主が私だと気付かなかったのかも知れない。私は再び、バアバ戻ってこい、と叫んだ。と、何を思ったか、それとも単なる勘違いなのか、体を戻すと急にバアバが駆け出した。そう先程の歩みよりは確実に早く、左足を引きずるように両肩を激しく左右に振りながら。一瞬信じられなかった。一体全体どこにそんな運動能

れ、今年は「種」も入れたかった。通常は半分程掘り起こし、残ったレンコンがまた根を伸ばし増殖した。ただそれを繰り返すと品質も形も悪くなる。だから数年に一度他の新しいレンコンを買い求め田に入れた。そのレンコンを「種」と呼んだ。ただ安い買い物ではなかった。

夕方近く玄関先に出て郵便受けの中を覗いていると農協の職員の車が見えた。ちよんどうい機会だからと、その「種」の購入について呼び止めたのだ。話は簡単に済んだ。やがて話は逸れ、天候のことや今年の苗の育ち具合など取り留めのない会話となり、私はつい彼がこれから様子を見に行くという溜池の方に同乗したのだった。やがて二人は溜池の淵に立った。私は再び眼下に広がる水田の光の粒の輝きに目を細めた。その時私は一つの影を見つけた。私は玄関の外鍵を施錠しないまま、迂闊にも外出していたのだ。

私は慌てて丘を駆け降りた。

家では前屈みに歩巾も小さく、時には壁に手を添えて歩くバアバが、まるで鎖を解き離された犬のように、大手を振って歩いている。いかにも楽しさを感じている大きな腕の振り、目標があたかも定まっているかのようなしつかりとした足取り。丘を駆け降りた時点で、すでに私の息は上っていた。私は両膝に手を置き、息を整えつつバアバの姿を追った。はるか彼方にバアバの後姿があった。とにかく今迄はこれといった事件は起こしていないように見えた。

力が潜んでいたのか。

私は転びそうになりながら、畦道あぜみちから落ちそうになりながら、再びバアバの後を追った。バアバは振り向きもせず逃げて行く。私よりもしつかりした足取りで。それでも間隔は狭まっていく。今ではバアバの息遣いがはっきり聞こえる。もう少して腕を伸ばせば、その襟元を掴むことが出来る。

その時だった。バアバがなんの躊躇も見せず田に飛び込んだのだ。逆にたじろいだのは私の方だった。植えたばかりの苗のことが頭をよぎった。まだ根も張っていない苗は荒らされれば簡単に浮いてしまうし、踏まれれば成育もままならぬ。機械で行なうとは言っても田植えもまた重労働なのは、元百姓の身が一番知っている。

「バアバ、田から上がれ」

私は声を張り上げ、その後ろ姿を追ってさらに畦道を走った。ただ直線に区切られ直角に交わる道だ。バアバは容赦なく斜めに田を横切る。泥に足を取られよろめき、時には四つん這いになっても、到底捕まえられるものではない。私は焦った。これでは埒がつかない。私は意を決して田に飛び込んだ。

二人はずぶ濡れ泥まみれだった。私の背の震えは私だけのものではなかった。脊負ったバアバも小刻みに震えていた。夕闇の迫る中、田の上を流れる風は冷たかった。バア



バは眠っているようにも思えた。私はただやるせない気持ちで家へと向かっていた。近所のばあさんが戸口で私達の姿を見ていた。声を掛けてこないのが幸いだ。さぞ惨めな格好に見えたことだろう。私はバアバが踏み潰した苗のことを思った。農協から新しい苗を買って自分で植え直ししようか、それとも話し合いで弁償しようか。いずれにしろ気の重いことだった。そのことが一層私の足取りを遅くした。やけにバアバの体重が重かった。衣服が水を含んでいるからだろうか。やるせない小さな憤りが生じていた。

私は湯船に湯を張りながら、タイルの床に付着した泥がボタボタ落ちるのも構わずバアバの衣服を手荒く剥ぎ取った。バアバは歯を鳴らし寒さに耐えるためか一言も発せず、座ったまま背を丸めていた。私はその背に熱いシャワーをかけた。ヒー、とバアバがさらに体を縮めた。少しは私の気が納まった。さらに首筋から前の方にも浴びせた。そして気まぐれに床に落ちた泥にも当て排水溝の口に流し入れた。

やがて風呂場全体が温かくなってきた。私はなんの前触れもせずバアバの頭にシャワーを浴びせた。バアバが再び悲鳴にも似た声を発し、両手で顔を覆った。私はシャンプーを頭にかけて。両手の指を鷲の爪のように曲げ、白髪の手を強く掻いた。泥の影響か泡立つことがなかった。肩甲骨

バアバの体を、あの時同じこの浴室で、妻は私と違った優しい行為で洗い流しながら涙を流した。私はその涙の訳を理解出来ないでいた。瞬間妻がなぜ涙したのか判ったような気がした。私も今涙を流しながらバアバの背を洗っていた。バアバに対する憐憫の情？ 自分に対する、いやバアバに対する蔑み？ バアバと私、そして妻。それぞれの思いの錯綜、末路の悲惨。いや言葉では言い表すことの出来ない心の奥底に押し込めた感情の露呈？ 私はその時の妻の心情がわかったような気がした。しかしそれは虚ろなものだった。そして一瞬にしてその理解したはずの意味も確信も消えてしまった。今バアバの背のボデーシャンプーの泡を流した後には背骨の浮いた皺だらけの肌がそのまま残ったように。

それでも浴室にはシャンプールの甘い香りは残った。私の心に残ったものは妻に対する謝罪の気持ちとバアバに向けた敵意だった。この先何年老いていくだけのバアバと二人、さすがねばならないのだろう。私は無理矢理バアバを立たせ、まるで生きたミイラのような乾いて浅く細かく走った皺だらけの前面を洗い流した。筋張った首、萎びて肌を張り付いた乳、落ち込んだ腹、女性としての存在の意味を持たなくなつた秘部、骨に皮膚を張り付けただけの足。そして私はバアバを湯船につけた。

縁から溢れ出た湯が音をたてて流れ落ちた。その中に身

を隠す程の長さだった。歳の割には量も多かった。バアバが髪を切ったのは何か月前だったか思い出せなかった。昔妻に一度頼んだことはあったが、貴方がしてあげたら、とにべもなく断られた。私は妻の栗色に染めた柔らかい毛先の感触を思い出した。バアバのそれは根性と同じで縮れ曲り、艶もなく硬かった。触る気もしなかった。ましてや散髪など思いもよらなかった。

時折姉が来た時に頼んだ。勿論美容院などで使う櫛やハサミがあるわけではない。姉もそんな技術は持っていない。裁ち鋏で髪の毛の先をただ水平に切り揃えるだけだった。髪形などまとまることもなく、姉もとうとう、最近は一千元やそこらの安い床屋があるからそこに連れて行ったら、と言った。そこは確かに安く時間も十分程で終わったが、バアバを連れて行くこと自体が面倒だった。

髪を洗い終わると私はバアバの背に再び熱いシャワーを当てた。バアバは一層背を丸めた。背骨が形そのままに浮かび上がった。一個一個確実に数えることが出来た。私はボデーシャンプーを振りかけ、柔らかいスポンジでその背を擦った。バアバは一言も発しなかった。私はわざと皮が剥ける程に強く力を込めた。それは自分が仕出かした罪に対する報いだとバアバに知らしめるためだった。言葉では理解出来ぬ年寄りには体罰は必要だった。

その時私は妻の涙したことを思い出した。汚物だらけの

を浸けたバアバは満足気に表情を緩めた。逆に私は苛立ちを増した。風呂場は十分に暖まっていたが、私の服は濡れたままだったし、体の芯は表皮が蒸気で蒸せた分寒さを感じていた。私は鼻歌さえ口ずさみそうなバアバを一度睨みつけると脱衣場で衣服を脱ぎ、バアバの分と一緒に丸め、横の洗濯場の床に放り捨てた。妻はそんな時盥に張った水にひたし、泥をゆすぎ落してから洗濯をした。一切無言だった。愚痴の一つでも言ってくれた方が気が楽だった。私は最初からゴミ袋に突っ込み捨てる気持ちだった。

素っ裸のまま私は台所に向かった。蛇口からお湯を出しシンクの中に頭を突っ込んだ。髪の毛の奥まで泥が入り込んでいた。バアバに似て硬い毛だった。そしてこの年齢にしては多い量だった。ただ何か月も整髪に行かないために毛先はあらゆる方向に丸まり伸び放題だった。だから洗うのが余計面倒だった。さらに苛立ちが増した。

私はシンクにお湯を溜めタオルを浸し体を拭いた。泥水はその臭いと共に体の隅々まで侵入する。しかも二度三度拭いても臭いは取れない。早くバアバを風呂から出してゆつくりと全身を洗いたかった。私は耳の奥にタオルの端をねじ込んだ。ここにも泥が入り込んでいる。

その時だった。風呂場から叫び声が聞こえたような気がした。私は慌てて浴室に向かった。覗くとバアバは全身を湯船の中に沈め、手足をバタつかせていた。時折顔を出し

息継ぎするのだが、また底の方に背から滑るように沈んでしまう。ステンレスの浴槽に水の浮力も加わって自力でバランスを取れないでいるのだ。湯船は大きい方だった。身長がある私には壁に背をもたせ掛け、足を伸ばせば反体側の壁に届いて良い塩梅にくつろげる広さだったが、妻は足を伸ばして壁に届くには相当に体を傾けなければならぬ。時折尻が滑って体が沈み込み、湯面が鼻先まで来ることがある、と冗談とも愚痴ともつかぬ口調で笑ったことがある。

私は、ヤレヤレ、と両腕をバアバの脇の下に潜らせ上半身を引き上げた。バアバは目をつむったまま赤い口を開け、喘息持ちのように激しい咳をし、湯を口元から滴らせた。私は白髪が張り付いた顔面を覗き込んだ。なぜかしらバアバの苦痛に歪んだ表情が快感だった。だからであるか、バアバ大丈夫か、と尋ねた口調に笑い声が混じった。「ああ、死ぬかと思った」

喘ぎつつ言いながら急に語気を強め、「この人殺しが」と叫んだ。それは確かに私に対しての言葉だった。

——人殺し——

思わぬ言葉に私はたじろいだ。私は現に浴槽で溺れそうになったバアバを助けたのだ。人殺しと呼ばれる由縁はない。

妻はバアバに対してはいつも無言だった。ただ亭主の母

の反省の念を抱いてもらいたい。死の恐怖から逃れようとする必死の思いからだろう、意外とバアバの反発が強かった。しかし所詮無駄な足掻きだった。無数の泡が昇り湯面に半円球の気泡を作り、その泡の中に籠ったバアバの悲鳴と呻きが、弾けると共に浴室に響いた。愉快な気分だった。バアバとこうして戯れることなど何十年振りだろうと思っ

た。私は再びバアバの体を持ち上げた。濡れた白髪が額に張り付いた。目は強く閉じられたままだった。鼻孔からは湯が滴り落ち、唇がわなないた。あばら骨が激しく上下し、薄い乳房が揺らめいた。

——バアバ、少しは反省したか——

ただ三食喰って糞して寝るだけの無為な人生。それを支えてきたのは一体誰のお陰だと思ふ。私は胸の内反芻しつつ腕を抜くと、再びバアバの頭を水面下へ押し込んだ。これは妻の分だ。バアバの体は底に沈んだ。手足のバタつきで私の頭から顔まで濡れに濡れた。私は左手で一拭きするとバアバを引き上げた。おおきく一息二息。全身の筋を使つての脈動が伝わる。私は間髪を入れずバアバの頭を押さへ込む。今度は娘の分だ。何一つ孫らしい優しさを見せなかつた罪だ。いや、娘のことに関しては妻がバアバに近付けることをしなかつた、という側面もあるか。私はすぐに引き上げた。私は実に冷静なのだ。両肩を上下させバ

親という、それだけの関係で言わば赤の他人だった。それでも妻はバアバの三食を用意し衣服を洗濯し、時には汚物の世話まで強いられた。それに対して呆けたとはいえ感謝の言葉もなければ、逆に暴言さえ吐いた。その総てが理に合わぬ奉仕の仕事だった。しかも亭主からの労いもないし、ましてや小姑からは仇のように睨み据えられた。家を出たのは当然と思えた。逆に言えばバアバさえいなければ私達夫婦は別れずすんだはずだ、と思えた。

妻がいなくなった後、私が曲りなりにもその後を継がなければバアバはとつくと野垂れ死にしていたはずだ。そのバアバが恩を感じることもなく、逆に私のことを「人殺し」と罵った。私は我慢出来なかつた。だから心の中で答えた。

——人殺しだと。この俺が？ 面白いじゃないか。じゃ、そうしてやろうじゃないか——

私はバアバの体の支えとなつている両腕を抜いた。バアバの体が再び湯船の底に滑り込んだ。ワーツ、という声と共に泡が浮き上がり、バアバの白髪が湯面に浮かんだ。手もがき、足がバタついた。湯面が激しく波打った。私はそんな様子を興味深く見詰めた。恐らく私はニタニタと笑つていたに相違ない。

私はやにわに浮き上がろうとするバアバの頭に右の掌を当てた。それは多分面白半分には違ひなかつた。もう少しバアバを苦しめてみたい。そして今迄の自身の行動や言語へ

アバは強く息を吸い込み、むせた。

「たつ、た、……、たすけ……」

助けて、という言葉が出ぬうちに私はまた右手でバアバの頭を押さえ込んだ。ギャーともワーともつかぬ声を残し、バアバの体は湯船の中に落ちた。私は面白い遊具を手に入れた子供のようにバアバのものがき苦しむ感覚を楽しんだ。

「どうしたバアバ。それ、ワツシヨイ、ワツシヨイ」

私は掛声と共にバアバが苦し紛れに顔を上げようとする動作を押さえつけた。過去にバアバと二人こんな楽しい遊びをしたことなどあったろうか。私は愉快な気分になっていた。妻や娘の側に立つて、時には疎ましいだけの存在であったバアバ。今は二人つきりになり、実際には年金目当ての見せ掛けだけの優しい言葉で、それでいて苛立ちのため罵声を浴びせたバアバ。しかし二人の間に想像を遙かに越えた楽しい遊びがあったとは。

(ワツシヨイ、ワツシヨイ)

突然だった。急にバアバからの抵抗が失せた。手足が伸び切り、押さえ込む右の掌への反発が消えた。口からの泡もなくなり、湯面の波立ちも小さくなってきた。私は、バアバどうした、と顔を近づけた。

バアバは動くことなく沈んでいった。右の鼻孔の先に透明の気泡が半分程覗いていた。口の中に赤い舌の先端が見

えた。両眼が血走ったまま大きく開かれていた。  
——遊びは終わったの？——

私はしばし訝りながらバアバの顔を見詰めながら右手を突っ込んだ。湯の中に広がったバアバの白髪が私の腕に絡み付いた。私はその感触に身震いし思わず腕を引き抜いた。その波動なのか、バアバの体がさらに落ちた。口の中から漏れ出した泡が揺らめきながら上昇し、半円の球を作り弾けた。風呂場は急に静かになった。私はバアバがこと切れたことを知った。何十年振り、いや親子となって初めてかも知れなかった母と息子の楽しい遊びは終わったのだ。

私は大事な玩具が突然動かなくなったことに驚き、やがてそれが二度と動かないであろうと悲しみ、もう一度湯中のバアバを見た。浮かび上がった白髪だけが揺らめいていた。私は風呂場を出ると台所に向かった。冷蔵庫を開け缶ビールを取り出した。冷たさが喉元を抜け胸中に拡散した。異常に喉が渴いているのを知った。一気に飲み干した。二本目を開けた。

私は流し台の方を見詰めていた。妻が台所に立つ後姿が見えた。嫁が来てからはバアバは台所に立つことはなかった。料理が並び終るまでテレビの前に座り、我々が席に着き声を掛けると黙って箸を取った。娘の幼い頃、好物のスパゲッティーやハンバーグが出ると露骨に表情を歪めた。時には嫌味たらしくご飯にお湯を掛け、ことさら音高く食

がって浮いた。スルメが二枚、私はそう思いながら台所に戻ると、再び冷蔵庫から缶ビールを取り出した。ビールとチューハイだけは豊富に入っている冷蔵庫だった。

ビールのアルコール度数で酔うことはなかった。逆に頭が冴えてきた。私はビールを片手に再び風呂場へ向かった。戸口に立ち湯船の中を覗いた。中の湯は完全に抜け、首を折り曲げた状態でバアバは動かなかった。一瞬風呂桶が棺桶のように見えた。しばらく見るとはなしに見下していた。ビールがなくなった。

私は台所に戻ると一升瓶を取り上げた。コップになみなみと注いだ。厄介な問題を背負い込んだことを私は悟った。ようやくバアバの死を感じ取った。そして私は冷静だった。まず今生活を維持するためにはバアバの存在は絶対条件だった。世間に対してはバアバは生きていてもらわなければならなかった。それは簡単なことだった。今ではバアバは家の中の隔離同然だったし、回りの人達もそのことは理解していた。ばあさん元気か？と尋ねられれば、ああ相変わらずだ、と答えればそれでよい。問題はバアバの遺体をどうするかだった。あくまでも人知れず処理することだ。埋めるしかなかるう、と思った。

ただ床下や庭の隅は嫌だった。私の居住空間にバアバがいつもいる、という意識は絶えず視線をそこに向かわすだろう。それは耐え難いことのように思えた。いくら遊びの

べた。妻と娘が二階で食事を取るようになるとバアバは饒舌になった。私は時折相槌を打つ程度で、ただビールを胃袋に流し込んだ。

その時私はふとバアバが眠っている振りをしてその場を逃れるのが得意だったことを思い出した。子供の頃繕い物をしているバアバの丸いふくよかな背に両手を当て、ネー、ネ、とおねだりすると、バアバは手を止めるとすぐにイビキをかき眠り込んでしまう。私がより強く背を押すとイビキはさらに大きくなる。根競べはいつも私の負けだった。

もしかしたら、と思った。今度もバアバは寝た振りならぬ死んだ振りをしているのではなかるうか。私は風呂場に戻り湯船の中を覗き込んだ。まったく動きはなかった。赤く開かれた口からは泡の一つも浮かんでこなかった。右の鼻の穴を塞いでいた半球の気泡だけが消えていた。私はあゝはと風呂の排水栓を抜いた。私がおねだりをし、バアバは寝た振りをしていたが、その願いは後日何らかの形で私を喜ばせた。

今回もそうなることを期待した。湯面がバアバの体を舐めるように下がっていく。浮かんでいた髪がバアバの顔に張り付いていく。私はほんやりとした気持ちで眺めていた。水量が少なくなるとバアバの体が底を滑った。小さな体だった。バアバの鼻先まで湯面が戻った。乳房が薄く広

うえとはいえ、バアバを死に追いやった罪の意識というものが多少は残るだろう。私はコップ酒を飲んだ。次に浮かんだのは例の溜池だった。山菜取りに使う大型のリュックに石塊を詰め、バアバに背負わせて縛り付け、放り込めば浮かんでこまい。しかし確か二年後には底さらいで溜池の水は抜かれる。当然バアバの白骨化した遺体が見つかる。私は過去に起きた、バラバラになった人骨が見つかり地域全体が大騒ぎになった事件を思い出した。あるいは、いや当然バアバの生存の有無が問われるだろう。私はコップに残った酒を飲み干した。そして二杯目を注いだ。

実は一番最初に浮かんだのが蓮田だった。しかしそこは私にとっては最も大事で大好きな場所だった。そこはバアバを埋める場所ではなかった。が逆にそこが人目にはつかぬ良所だった。滅多に他人は寄りつかなかったし、そこで穴を掘っていても不思議な光景ではなかった。私はそのことをバアバに尋ねようと思った。話をすればバアバはきくと喜んでくれるに違いない。蓮の花が咲いた時バアバを連れて行ったことがある。丸く大きく広がった緑葉の中から突き出て、薄桃色の蓮の花が開いていた。バアバはその光景に思わず両手を合わせ、ほんに極楽のようじゃのう、とナムアミダブツを何度も唱え、こうべを垂れた。だから蓮田ならバアバは望み通り極楽に行けるのではなかるうか。それに私の仕事振りだつてすぐ間近から見ることが出来



る。私は確信した。

私は鍬を片手に蓮田に向かった。飲んだ酒は体を暖めることもなく、そのためでもなかるうが私の体は細かく震えていた。だから私は精一杯に鍬を振った。夜の闇は深く沈んでいたが慣れた土地だった。それに目を閉じても出来る仕事だった。バアバの体を埋めるだけの穴を掘ればいい。私はぬかるむ足を何度も抜きながら、息も吐かず鍬を打ち下した。より深いものにしよと思つた。蓮田の真ん中に掘り上げた泥が円を描いて積み上げられた。夜が明ける前にバアバを埋めなければ、と必死だった。腰程にまで掘り下げると私は穴から這いずり出た。荒い息を沈めるべく縁に足をかけ覗き込み、バアバの丸まった体を想像した。充分な深さだった。私は大きく一息吐くと丘を降りた。

バアバの顔にタオルを掛けその表情を隠すと湯船の中から引き上げた。濡れたままバアバの部屋まで引き摺り、寝間着を巻き付けた。私は出来る限りの場所まで車椅子を利用することを思い付いた。意志をもたぬ肉体は想像以上に重たかった。車椅子に乗せること自体も簡単にはいかなかった。幾度も崩れそうになる体の重み。バアバの体を帯紐で固定せざるを得なかった。しかしその努力は報われた。実にスムーズな移動だった。遠く山々の稜線が輝き始めていた。時折車椅子が大きく揺れるとバアバの体がずれた。私はさらに強く帯紐を縛り直した。それでも誰かが見

れば、孝行息子が痴呆の母と朝早い散歩を楽しんでいる、そう思われることを望んだ。が幸い人目はないようだった。

いよいよ登りがきつくなってきた時点で私はバアバを背負うことにした。車椅子の帯紐を解くと、そのまま後から両脇の下を通し私の背に担ぎ上げた。さらに帯紐を胸の辺りで一度撚り、ふたたび背に回すとバアバの尻にあてがい、一揺すりしてバアバの体を引き上げると前で結んだ。両肩の上からバアバの両腕が突き出た。私は恐怖と共にその腕を払った。

普段は何気なく登った蓮田までの坂を喘ぎつつ、時には四つん這いになって進んだ。バアバが意地悪く笑っているかのように思えたのは、早起きした野鳥の声だったかも知れない。私はようやく蓮田の縁にバアバを背負ったまま座り込み、短く浅い息を吐いた。目の奥に幾度か閃光が走った。下界に広がる水田の畦模様が見えるようになった。

私は気合いを声にして立ち上がると蓮田に入った。二人分の重量で一層深く足が沈み込んだ。よろめき倒れ、四つん這いになると片手を抜き片足を抜いた。しかし体力的な疲労は増すばかりでその都度大きく息を吐かねばならなかった。私は泥田につかたまま思案にくれた。夜明けまでにはどうしてもバアバを埋めておかねばならない。私は背負った帯紐を解いた。バアバの体がずり落ちた。私は背を伸ばした。筋が音をたてると同時に妙な解放感を感じ

た。私は気を取り直すとバアバの背後から両脇に手を回して抱え起こし、そのままするように穴に向かった。楽ではなかったが背負うよりはましであった。

私もバアバも泥に塗れた。なぜ片隅に掘ることを思い付かなかつたのだろう。作業的には最善の策なのに。誰もが当り前に考えつくことであるうに。しかし今更新しい穴を掘り返す気にはなれない。時間が惜しかった。さらに重みを増したバアバをこれ以上あつちへ持つていたり、こっちへ戻したりなどする気力もなかった。私は沈む足を、時には履いた長靴が抜き取られしながら、とにかくバアバを穴の縁まで引き摺った。

穴の底にはすでに三分の一程までの水が溜まっていた。闇の中に黒く重い水だった。私は穴を掘った泥で高く積み上がった上にバアバを腰掛けるように置くと、そのまま両肩を押した。バアバは頭から背中を滑らすように穴へと落ちた。とその時だった。押すという対象物が急になくなったため両腕が支えを失った。同時に足が滑った。私は体のバランスを崩し突つ込むように穴に落ちた。水飛沫が掛かり私はバアバの上に重なった。バアバの顔が私のすぐ前に押され浮かんた。顔面に張り付いた長い白髪、充血し見開かれた目、垂れ下がる赤い舌。湯舟でのバアバの顔を思い出し、私は思わず悲鳴を上げた。そして私はバアバを自分の手で殺したことを悟った。

後は夢中だった。バアバの体を土台に両足を支え、崩れ落ちる泥の山に爪を立てた。ずり上がろうとする私の足が引つ張られ、引き摺り込まれそうな恐怖に駆られ、私は必要以上に手足をバタつかせた。漸く穴から出ると今度は両手で盛り上がった掘土を穴の中に押入れ落とした。総てを覆い隠すために。

バアバのいなくなった私の日常は穏やかなものだった。その存在を気にすることもなく、大声で叱責することもなく、夜中に起こされて雑巾を持つて走り回ることもなくなった。私は私のことだけをすればよかった。目が醒めれば起き、冷蔵庫の中を覗き、有る物を喰った。なければコンビニに向かい、日中は好きなパチンコや平日低料金のカラオケ店で一人マイクを握り、夜はマーケットで出来合いの総菜を買い、気ままにテレビを見ながらビールを飲んだ。近くの居酒屋へも気楽に出掛けられた。金は偶数月の十五日には確実にバアバの年金が振り込まれた。余程の贅沢をしなければ充分な額だった。それでも振り込まれる一週間前には残金が少なくなることもあった。そんな時はインスタントラーメンは心強い味方だった。不安はなかった。役所の仕事は安定していた。

ただ都合の悪い変化もあった。さすがに風呂場を使うことにためらいがあった。そこがバアバの最後の場所だ、と

いう意識が絶えずあった。そして手を下したのが私だったからだ。風呂場の戸はあれ以来開けられることはなかった。私は二日に一度銭湯に出掛け、時には奮発してスーパー銭湯で半日を過ごした。そしてもう一つ日課となったのが蓮田の見回りだった。しかしそれは天気の良い日中に限られた。私は泥土の上の上澄みのように澄んだ水に満たされた蓮田を見る。視線は否応なしにバアバを埋めた中央に注がれる。そこだけが回りより盛り上がり、心なしか赤く染まって見える。バアバの血が浮き上がり、土に染み出ているのだろうか。私は時折人気がないことを確認すると手を合わせる。迷わず成仏してくれよ。

やがて蓮田の水面のあちこちから突き出るように芽が出、次から次と浮草のごとくに小さな丸い広がりを見せる。幼葉は日に日にその数を増して大きくなり、梅雨の頃ともなると茎を水面より伸ばし葉も一層大きくなる。それでも依然として茎の間から中央辺りを透かし見ることが出来る。余計に覗きたくなるのは私の罪の意識からだだろうか。しかしそれは蓮田から離れることで忘れてしまう。私は飽きもせずパチンコ店へ行き、カラオケを楽しみ、馴染みの居酒屋で酒を飲む。

「バアサン? 相変わらずだよ。喰って寝て、ウンチ山盛じゃ」

姉には小まめに連絡を取った。それはあくまでも姉を安

踏っていた。中央の盛り上がりは以前よりは確かに低くなっていた。それはバアバの魂と腐った肉体がその土の中で分解し、栄養となって蓮の成長を促し、花の開花と共に極楽へ昇って行った、ということだろうか。私はそう信じなかった。だが確信はなかった。だから時には数時間も立ち尽くすことがあった。

レンコンへの執着は大きなものがあった。農協からの催促もあった。年金の枠内での生活は時には麻痺感覚に陥り節操をなくし、窮屈な生活を余儀なくせざるを得ない月もあった。それ以上に私自身が毎年楽しみにしていたレンコンの味を欲した。たとえ一本、たとえ一口でもよかった。

風もなく穏やかな初冬の日差しだった。一羽のカラスが近くの雑木に止まっていた。ヤツの狙いは堀起こされた土塊から頭を出すミミズやザリガニや、時にはドジョウだった。素知らぬ顔であらぬ方向を向いているが、その意図は充分過ぎる程私に伝わっていた。そして相変わらず躊躇する私を嘲っているようにも見た。別にカラスと張り合う気はなかった。私は決心した。隅の方なら問題なからう。それは手前勝手な判断に違いなかった。私はゆっくりと右足の爪先を泥土の上に置いた。柔らかすぎる土面の感触を足裏に感じた。

僅かに沈みこんだ。しかしそれ以上沈み込むことはなかった。左足を浮かせた。そして下した。二本の足が蓮田

心させ、こちらに出向かせぬためだったが、姉にとっては有り難いことに違いない。向こうにも年老いた夫の親がいるのだ。それ以後顔を見せることはなかった。

初夏の青い風が吹く。背丈程に伸びた茎に大皿を乗つけたような蓮の花が重なり合いながら大きく揺れる。もう中に入らぬ限り田の中は見えぬ。そしてその葉の密集から水滴の形をした花芽が伸び上がる。薄い桃色を滲ませたそれは、やがて両手を丸く合掌させた姿に膨らみ、そして開く。紅色に色づく田の中央に開花したその色は、回りの花よりさらに色濃く血の色に染まっている。バアバはその蓮の花に鎮座する仏の姿となって、やがては成仏する、と念じる。

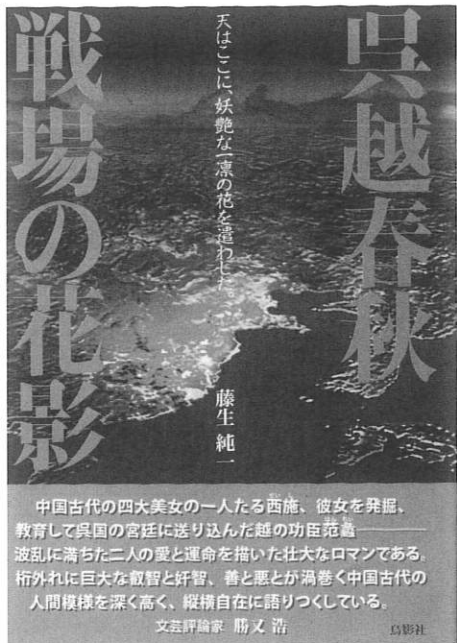
蓮田の水抜きは一週間程前に済ませていた。それでも今年には土を平に均なさなかつたため、所々に大小の水溜りが残った。茎も刈り取ることをしなかつたので、茶色く硬く圧縮された一本となつて多くが立ち枯れし、あるいは中折れしていた。またジョウロの先端の水を噴き出す口のような形にも似た円形の花托が、種の抜けた穴を曝け出して起立しなかにはその頭を折るように垂れている。時折種を残したまま枯れた花托が風に揺られてカタカタと音をたてた。私にはその光景が荒れ果てた地に立つ卒塔婆の乱立に見えた。

だからであろう、私はレンコンを掘る独特の細く先の方が平たい鍬を持ちながら、田に足を踏み入れることを躊

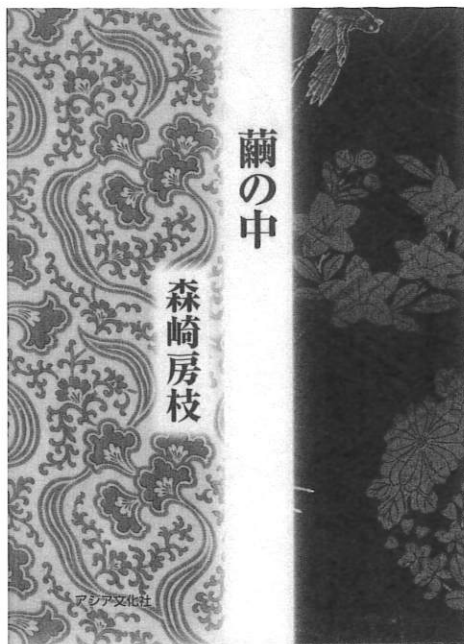
に入った。カラスがこちらを向いた。視線が合うか合わぬかに横を向いた。私は鍬を振り上げ、力一杯に降ろした。水飛沫が跳ね深々と刺さった。そして堀起こし二鍬三鍬と同じ動作を繰り返した。

いつもは暫らく掘り続ければ、土中で伸びた芽の一つや二つすぐに見つかった。しかし今日に限っては様子が違った。例年より深く掘ってみた。一向に成果はなかつた。もしかしたら田のレンコンをバアバが総て食べ尽くしたのではなからうか。あり得ない妄想が頭を過つた。早速私が掘上げた土塊をカラスが嘴くちばしで突いていた。私には今だに収獲がないだけに無情に腹が立った。もう止めようと思いつつ一鍬入れた。その先にレンコンの芽が跳ねるように飛び出た。いよいよ、と私は思った。そして掘り下げた。やがて黄色味を帯びたレンコンの肌が見えた。慎重に回りの泥を掘った。かなりの大きさが想像された。私は内心小躍りしつつ鍬の先端を動かした。しかもその奥にさらに二本、別の芽が伸びているのを発見した。私はもう有頂天だった。まず最初の一本を取り上げた。四段にもくびれたそれは太く丸くさらに色白だった。久々に豊かな女性の肉感を感じた。

私はすぐに二本目に掛かった。レンコンはその辺りにかなるの本数が密集しているようだった。三本目さらに四本目。面白い程の本数だった。私は塹壕でも掘るように収獲



中国古代の四大美女の一人たる西施、彼女を発掘、教育して呉国の宮廷に送り込んだ越の功臣范蠡。波乱に満ちた二人の愛と運命を描いた壮大なロマンである。桁外れに巨大な叡智と奸智、善と悪とが渦巻く中国古代の人間模様を深く高く、縦横自在に語りつづけている。  
文芸評論家 勝又 浩 鳥影社

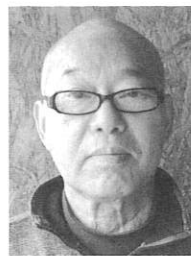


まほろば賞特別賞・銀華文学賞優秀賞受賞作品  
235 森崎房枝名作集 1540円 (税込/送料共)



を続けながら進んでいった。私は腰まで浸かりながら新たな獲物に取り掛かった。それは先端からして丸々と肥えていた。私の両手はさらに慎重度を増した。途中で折るうものならせつかくの逸品が台無しになる。これは農協には卸さず、初物として今晚の食卓に乗せよう。ようやく最後の泥を除くと、私はレンコンの下辺に両手を差し入れた。そして白く輝く処女を抱き起こすようにゆっくりと優しく持ち上げた。二メートルはあるのか、という立派な物だった。私は思わず歓喜の声を上げた。その声に驚いたのか例のカラスが鳴き声と共に飛び上がった。風もないのに立ち枯れた蓮の茎がその瞬間大きく揺れた。花托の中に残った種が激しい音を立てた。私はいつの間にか夕闇迫る中、バアバを埋めた田の中央に、あの時と同じ大きな穴を掘っていた。まるでレンコンに誘われるように。

私の全身に震えが走った。穴の壁から血が染み出てくるような錯覚に落ちた。豊潤な処女の体が見る間に痩せ細り、その艶を失い凝縮して、私は骨を握りしめていた。慌てて投げ捨てると穴から脱出すべく両手で回りに盛り上げた泥の山に手を掛けた。そして力一杯体を引き上げようとした。しかし両足がドップリと泥の中に埋まっていた。片足をなんとか抜き、残った足も、と力を入れると先に引き上げたはずの足が沈んだ。もがけばもがく程足は沈み込む。まるで何者かに両足を引き摺り込まれるような気がし



飯田 勇

いいだ ろう

1949 金沢生まれ  
本名 飯田誠治  
同人誌「渤海」「彩雲」を経て  
現在「じん文学」同人  
金沢在住

〔「じん文学」104号より転載〕

た。私は両手の指を回りに積み上がった泥の山に突き立てた。そして力強く体を預け、上体を浮かそうとした。その頼みの泥山が崩れた。私は穴の底に尻餅をついた。すぐに立ち上がるうと両手をついて腰を上げようとした。が逆はその支柱となるべき両腕が粘土質の泥で絡み取られた。誰かが私を蓮田の中に引き摺り込もうとしている。それは？ 私はその時穴の底から湧き上がる樂しげにはしゃぐ声聞いた。

ワッショイ、  
ワッショイ、



じゅん文学

愛知県

自由に入会、気ままに退会

創刊は一九九四年六月一日である。年間4号発行して一〇〇号まで二十五年かかった。始めはそれでやめようかと思っていたが、同人の大半がもつと続けたいという意見だったので、一一〇号迄、年三号ということにして、現在、一〇六号を制作中である。同人数は三十五人。

私は二十三歳で小谷剛主宰の同人誌『作家』に入れてもらった。小谷剛とは戦後第一回芥川賞受賞者であり、その受賞作も『作家』十一号に掲載された作品である。当時の芥川賞は同人雑誌からの推薦作が多く、商業誌の新人賞から選ばれるようになったのは一九七六年の村上龍氏あたりからではなかったか。小谷剛の両親ともに享年九十歳以上だったので、小谷主宰も長生きされるだろうと、安心していただけだが、突然、結腸癌にかかって、六十六歳で逝ってしまった。月刊で四十四年、五一六号で終刊。

『作家』での私は約三十年で三十一の作品を発表したのだが、終刊後、どうしようと困った。私は時々『文学界』などの同人雑誌批評で褒めてもらうだけで満足していて、新

人賞に応募する意欲も実力もなかった。

それでも幸運なことに、当時は名古屋で経営していた出版社が、『作家』に掲載された小説を本にして出版してあげると言ってくれた。自費ではなく商業出版してくださったのだが、売れなくて評論家の目に留まることもなく、作家デビューすることもできなかった。だが、取り敢えずは、同人雑誌に書いていても、読んで認めてくださる人がいるとわかって嬉しかった。

結局はこれからも同人雑誌で書いていこうと思ったのだが、そのためには、同人雑誌を創刊しなければならぬということでもあった。小谷主宰が病気になる前から、私はカルチャーセンターの講師の代役をしていて、その受講生



25周年・100号記念祝賀会

が発表の場を求めている。つまりその人達にも発表の場が必要であった。幸いに私は『作家』時代に編集の手伝いもしていたので、何とか自分で同人雑誌を創れるだろうと一念発起した。

『じゅん文学』という誌名は最初の同人十人くらいで決めた。同人の中には、いわゆる純文学を書く人ばかりではなく、直木賞受賞作のような読み物作品を書く人もいたので、平仮名の「じゅん文学」にしたという次第。

次は創刊号の「あとがき」だが、まったく自信のない文章で恥ずかしい。

「同人誌は無理に続けようとしたら、惰性で続けるものではない。仲間がいるうちは八年くらい続けたいと思うが(私の定年)、もしかしたら一年も続かないかもしれない。二十一世紀になっても、果たしてひとびとは、文学に対して『じゅん』な気持ちでいられるのだろうか。何事も命と同じで、先のこととはわからない」

ちなみに「私の定年」とは、六十歳のことであり、創刊時は五十二歳であった。一九九四年は大江健三郎氏が日本人では川端康成に次いで二番目のノーベル文学賞を受賞した年であった。川端康成のデビューは同人誌からであったが、大江健三郎氏はもう、普通の意味での同人雑誌からはなかった。「じゅん文学」はそんな年に誕生した。

創刊以来、いろいろ大変ではあったが、幸いなことに文

第3回 文芸思潮新人賞 作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない鋭い小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

**募集内容** ● オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

**応募資格** ● 2022年4月30日時点において39歳以下の者

**応募規定** ● 2万字以内。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合はA4を用いること。

別紙に①応募部門を明記（第3回文芸思潮新人賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

**応募審査料** ● 2800円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは26USドル。

**応募先** ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「文芸思潮新人賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮新人賞

**最優秀賞** ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

**優秀賞** ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

**奨励賞** ■ 賞状・賞メダル 佳作・入選 ■ 賞状

**選考委員** ● 作家集団「塊」メンバー

**締切** ● 2022年4月30日（当日消印有効）

**発表** ● 予選通過者は2022年9月25日発売の「文芸思潮」85号に発表する。受賞作・優秀作は2022年12月25日発売の「文芸思潮」86号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 新しい世代による新しい小説を読みたい。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て見映えよく覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の根源的な問題が潜んでいる。それを剔出するような新鋭の作品を期待しています。



明の利器が救ってくれた。『作家』の頃は活版印刷で、編集や校正に苦勞したが、その頃、ワープロというものが出現、一九九五年にはマイクロソフト社のWindows 95が発売され、インターネットが始まった。

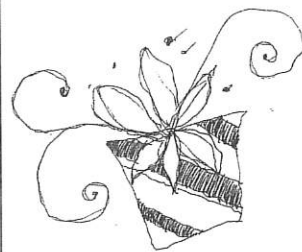
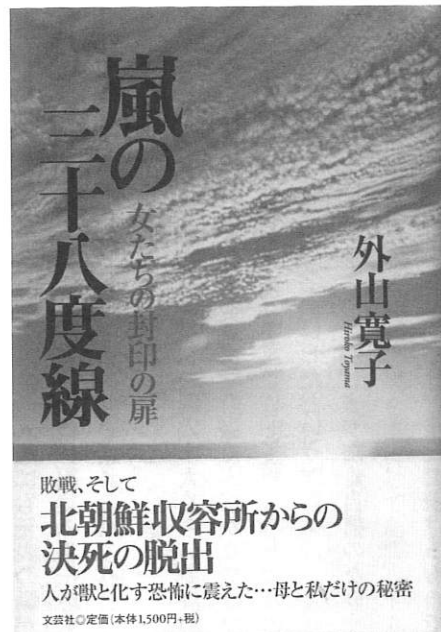
早速に、提出原稿は手書きではなくCDかEメールでの添付ファイルで、ということにした。結果、思いがけなく全国的に同人になりたいという人が増え、沖縄や九州などの遠方からの入会もあった。自由に入会できて、気ままに退会を許可したので六十人以上の同人がいた時もあった。

十年二十年と続けているうちに、優秀な書き手がたくさん入会してきた。合評会などで切磋琢磨したからか、各方面での文学賞を受けたり、新聞や雑誌で高評価を受けた人も多い。

そんななかで終刊を決めたのは、私も来年は八十歳だからである。視力も体力も弱ってきて、急に倒れた時のことを考えると、元気をうちに終わらせたほうが良いと思つた。他の人に頼んではと言つてくださる方もいるが、パソコンでの書式設定や編集作業など、ひとりだけでやってきたので、今さら依頼することは難しい。

紆余曲折はあつたが、終刊まであと5号、何とか無事にたどり着きたい。終刊近くになって「文芸思潮」さんに紹介されることになり、最高の思い出になった。謹んで御礼申し上げます。

（主宰／戸田鎮子）



「じゅん文学の会」 主宰／戸田鎮子  
〒463・0003  
愛知県名古屋守山区下志段味字西の原八九七  
電話・FAX 052・718・1493  
Mail = sadot@gctv.ne.jp